

島根大学考古学研究室調査報告第5冊

石ヶ坪遺跡

発掘調査概報Ⅱ

2003

島根大学法文学部考古学研究室

島根大学考古学研究室調査報告第5冊

石ヶ坪遺跡

発掘調査概報Ⅱ

2003

島根大学法文学部考古学研究室

序

山陰地方における「縄文農耕」の実態を解明すべく始めた石ヶ坪遺跡の調査も、今回で二回目をむかえた。前回の調査からわずか一年が経過したにすぎないが、この間に各地においていくつもの縄文時代遺跡の調査が行なわれ、山陰地方における縄文時代像は、従来に比べてさらに具体的に描くことが可能となってきている。その中でも石ヶ坪遺跡の調査は、山間部における生業のあり方や、他地域との交流のあり方を考える上で、小規模ながらも、着実に成果を挙げつつある。特に今回は、前回の調査に引き続き、掘り上げた土はすべて5mmメッシュのふるいにかけ、微細な剥片の回収も行なったことにより、石鎚の製作過程を知りうる資料を入手できたことや、石錘をはじめとして小規模河川における漁撈のあり方を推察させる石器組成のあり方が把握できた。本書は、教育と研究をかねた、上記第二回目の発掘調査の概報である。

発掘調査並びに概報の作成は、昨年度も調査に参加した学部三年次生を中心として進められた。しかし、前回の反省点がほとんど活かされなかつたという問題点を残したこととも指摘しておかねばなるまい。学生諸君の今後の奮起を期待したい。

なお、調査中匹見町の方々には肉や野菜の差し入れ等、様々な暖かい御配慮を賜った。ここに記して感謝したい。

2003年4月30日

島根大学考古学研究室

渡辺 貞幸

山田 康弘

例　　言

- (1) 本書は、島根県美濃郡匹見町大字紙祖に所在する石ヶ坪遺跡の第4次調査概報である。
- (2) 発掘調査は、2002年8月19日から9月9日にかけて実施した。
- (3) 発掘調査は、島根大学法文学部考古学研究室が行なった。
- (4) 本書では柱穴状遺構を「P」、土坑を「SK」と表記し、性格の不明な黒色土の落ち込みを「ピット」として記述を行なった。
- (5) 土層の色調については小山正忠・竹原秀雄編集、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、日本色研事業株式会社発行の『新版　標準上色帖（1993年版）』を使用した。
- (6) 出土品の整理作業と報告書作成の諸作業には考古学専攻の学部生があたり、作業の一部は島根大学法文学部の授業科目「考古学実習Ⅱ」の一環として行なった。
- (7) 発掘調査及び整理作業の参加者は以下の通りである。

発掘調査：渡辺貞幸（法文学部教授）、山田康弘（法文学部助教授）、多満利麻衣子（4年生）、
稻田陽介、小池康明、小林大樹、酒井雅代、日高優子（以上3年生）、
池田恵理、佐海由美子、高畠あゆみ、三谷早希子、山中将士、油利 崇（以上2年生）、
客野裕治、山中 玲（以上1年生）

整理作業：稻田陽介、小池康明、小林大樹、酒井雅代、日高優子、池田恵理、佐海由美子、
高畠あゆみ、三谷早希子、山中将士、油利 崇

- (8) 発掘調査でのフィールドマスターは稻田陽介が担当した。
- (9) 本書の編集は山田康弘が行ない、執筆担当は文末に示した。
- (10) 出土遺物および記録図面、写真は、すべて島根大学法文学部考古学研究室に保管されている。
- (11) 調査および本書の作成にあたって、匹見町長、教育長をはじめとして匹見町の全面的な御協力をいただいた。また次の諸氏、諸機関より御教示、御協力を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略、順不同）

池淵俊一、広江耕史（以上島根県教育庁文化財課）、足立克己（島根県立八雲立つ風土記の丘資料館）、會下和宏（島根大学埋蔵文化財調査研究センター）、渡辺友千代、栗田美文、山本浩之（以上匹見町教育委員会）、宮田健一（津和野町教育委員会）、竹広文明（広島大学大学院文学研究科助教授）、藤原英保（島根大学）、山中 章（三重大大学人文学部文化学科教授）、甲元眞之（熊本大学文学部歴史学科教授）、荒木隆宏（熊本大学大学院文学研究科修士課程）、山崎真治（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）、上田妙子、齊藤ソノ、西岡和了、西岡安乃、宮市美佐子、森 久枝（以上雪舟山莊）

本文目次

第一章 序論	
1. 遺跡の位置と環境	1
2. 過去の調査の概要	4
第二章 調査の概要	
1. 目的と経過	6
2. 基準土層	8
3. 造構と遺物の検出、出土状況	12
第三章 出土遺物	
1. 縄文土器	18
2. 石器	24
第四章 考察	
1. 出土土器について	34
2. 出土石器について	35
第五章 まとめ	38

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 第1～4次調査区配置概念図	5
第3図 調査区および造構配図	7
第4図 K～L-16～18区セクション図	9
第5図 K～L-14～15区セクション図	11
第6図 K～L-16～18区6層中疊群実測図	13
第7図 K～L-14～15区造構配置図	15
第8図 SK-02・03造構実測図	17
第9図 出土土器実測図(1)	19
第10図 出土土器実測図(2)	21
第11図 出土石器実測図(1)	25
第12図 出土石器実測図(2)	27
第13図 出土石器実測図(3)	29
第14図 出土石器実測図(4)	31
第15図 出土石器実測図(5)	32
第16図 出土石器実測図(6)	33

図版目次

- | | | |
|------|---------------------------------|----------------------------------|
| 図版1 | 上 遺跡遠景（北側より） | 下 遺跡近景（南東側より） |
| 図版2 | 上 調査区設定状況（南東側より） | 下 調査区全景（南東側より） |
| 図版3 | 上 K~L-16~18区南北壁セクション
（北東側より） | 下 K~L-16~18区北東壁セクション
（南西側より） |
| 図版4 | 上 K~L-16~18区南北壁セクション
（北西側より） | 下 K~L-14~15区北東壁セクション
（南西側より） |
| 図版5 | 上 K~L-14~15区南北壁セクション
（北西側より） | 下 K~L-16~18区6層中縄群検出状況
（北西側より） |
| 図版6 | 上 SK-02・03検出状況（北西側より） | 下 SK-02・03完掘状況（北西側より） |
| 図版7 | 上 SK-02検出状況（北西側より） | 下 SK-02半截状況（北西側より） |
| 図版8 | 上 SK-02完掘状況（北西側より） | 下 SK-03検出状況（北西側より） |
| 図版9 | 上 SK-03半截状況（北西側より） | 下 SK-03完掘状況（北西側より） |
| 図版10 | 上 出土土器（1） | 下 出土土器（2） |
| 図版11 | 上 出土土器（3） | 下 出土土器（4） |
| 図版12 | 上 出土石器（1） | 下 出土石器（2） |
| 図版13 | 上 出土石器（3） | 下 出土石器（4） |
| 図版14 | 上 出土石器（5） | 下 出土石器（6） |
| 図版15 | 上 出土石器（7） | 下 出土石器（8） |

第一章 序論

1. 遺跡の位置と環境

匹見町は、島根県南西部に位置し、広島、山口両県に接している。本町は山間部であるため、年平均気温は13℃と冷涼であり、気象は変化しやすく、年間を通して多雨多雪である。面積の96%は山野で占められ、クリやトチなどの落葉広葉樹が繁茂している。このような豊富な山野の資源の中で、イノシシ、クマ、サルなどの動物が棲息している。河川にはアユ、ヤマメなどがおり、またオオサンショウウオがみられることがある。匹見町はこのように自然の資源に囲まれ、狩猟、漁撈、植物採集に適した環境にある。

石ヶ坪遺跡は匹見町大字紙祖に所在し、紙祖川と小原川の合流地点に形成された河岸段丘の右側に立地する。遺跡は海拔約300m地点に位置し、匹見町の中心部半平地帯の南端部にあたる。遺跡周囲は、水田が下流域に向かい緩やかに傾斜しながら広がっており、三方を500m級の山々に囲まれている。

本遺跡付近は、昔から交通の要所として栄えた場所であった。石ヶ坪遺跡第1～3次調査では、九州系の縄文土器である並木式、阿高式土器や大分県鶴島産の黒曜石が出土しており、九州との交流が想定されている（渡辺1990・2000、山根他2002）。中国山地には、南西から北東にのびる尾根があり、その尾根に沿って、南西へは山口県方面、北東へは島根県三瓶山方面にぬくことができる。さらに、室町時代においても益田氏の居城であった小松尾城が、遺跡の南西側に立地していることからも、この地域が古くから交通の要所であったことが分かる。

石ヶ坪遺跡から北東に向かうと、紙祖川と広見川が匹見川本流に合流する地点があり、その地域には遺跡が集中している。最も古いものでは縄文時代早期の上ノ原遺跡（中村1995）があり、石鎚や打製石斧などの石器や押型文土器が出土している。縄文時代後期から晩期にわたる水田ノ上遺跡（渡辺1991）からは、多数の配石遺構が検出されている。出土遺物も、土版、土偶、硬玉製管玉、碧玉製小玉、滑石製小玉などがあり、これらの配石遺構は、祭祀の場または墓と考えられている。水田ノ上遺跡で検出されている環状列石状の遺構は西日本ではあまり類例がみられず、東日本との関連も考えられている。ヨレ遺跡（渡辺他1993）でも縄文時代後期から晩期にかけての配石遺構が検出されており、また縄文時代の遺跡でみつかることはまれな鳥形土製品が出土している。石ヶ坪遺跡でも配石遺構が検出されており、また、その下層から住居址がみられることから、二つの時期における性格の違いについて注目される。本遺跡から紙祖川上流に向かうと、縄文時代前期にあたる中ノ坪遺跡（渡辺1999）があり、紙祖川と三葛川の合流地の右側に立地している。中ノ坪遺跡でも、配石遺構が検出されており、溝式、曾畠式といった九州系の縄文土器も出土している。また匹見川中流域に位置する田屋ノ原遺跡（渡辺2001）でも、並木式土器が出土している。匹見町の北東の匹見川上流域では、田中ノ尻遺跡（渡辺1997）や新植原遺跡（松本1987）が存在する。田中ノ尻遺跡では縄文時代早期の集石場がみられ、中ノ坪遺跡と同様に溝式、曾畠式といった九州系の縄文土器も出土している。新植原遺跡は田中ノ尻遺跡から赤谷川を隔てた場所に位置しており、縄文時代早期から中期にかけての遺物だけでなく、旧石器時代に属すると思われる削器類も出土している。山間部に位置する匹見町の縄文遺跡は、多数の配石遺構が検出されていることや、九州系の縄文土器が多く出土していることなどか

ら、島根県の縄文時代研究において注目されている。そのような中で、配石遺構、九州系の縄文土器の二つを伴っている石ヶ坪遺跡の方は重要なものであろう。

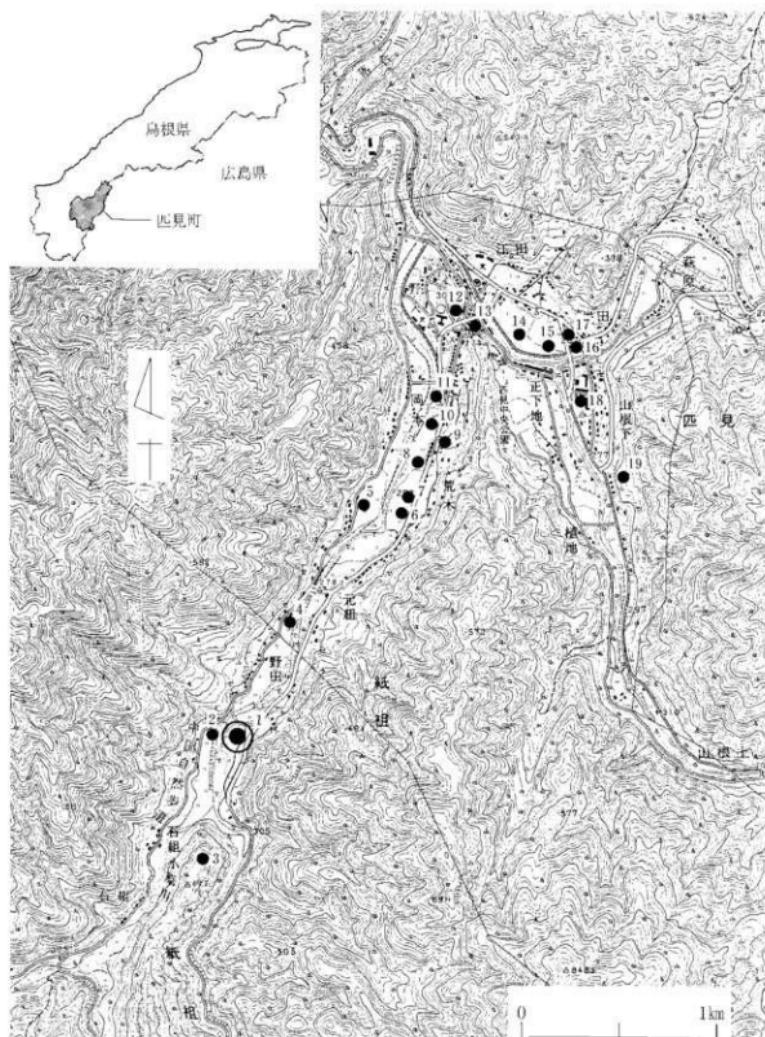
次に弥生時代の遺跡について概観してみよう。立地については、縄文時代に引き続いで河岸段丘に位置しているものが多い。遺跡は平地の多い匹見町中心部に集中しており、前田遺跡、筆田遺跡、木戸開中遺跡、塚田遺跡、江田平台遺跡、平田遺跡、ヨレ遺跡、イセ遺跡、下手遺跡など多数の遺跡が存在している。水田ノ上遺跡の南側の一角にあたる槍田地区には、細形銅剣あるいは銅戈と考えられる武器形青銅製品の先端部が出土し、また弥生土器が探集されていないことから、青銅器の埋納があったと考えられている（松本他1991）。下手遺跡からは、弥生時代前期後葉から中期中葉のものと考えられる配石遺構が検出されている。これについては、墓地や祭祀遺跡などの説があるが、それを裏付ける骨片あるいは呪術具は確認されていない（渡辺1993）。このように、弥生時代においても複雑な文化様相が想定される。

古墳時代以降の遺跡についてみてみると、古墳時代には和田古墳、野入古墳、牛首古墳などが存在している。これらは山丘の尾根上や山裾部に立地しており、小規模なものが多い。長グロ遺跡は奈良時代から平安時代にかけての集落跡であり、平面プランが方形の聚穴住居が10棟以上密集している。また石ヶ坪遺跡の下流には、縄文時代から平安時代までの複合遺跡である下正ノ田遺跡があり、7世紀後半から8世紀後半の住居址と考えられる溝状造構を検出している。中世では、製鉄遺跡や山城が多く存在する。石ヶ坪遺跡の対岸に位置する森ノ前遺跡では、中近世の陶磁器が出土している。

このように匹見町は山間部ではあるが、多数の遺跡が存在している。また、周辺には自然が豊富であることから、古くから生業活動の最良の場として利用されたのだろう。（小林 大樹）

引用文献

- 中村友博編 1995『島根県匹見町上ノ原遺跡の発掘調査』匹見町教育委員会
松本岩雄編 1987『新横原遺跡発掘調査報告書』匹見町教育委員会
松本岩雄・岩永省三 1991『島根県美濃郡匹見町出土の青銅器』渡辺友千代編『水田ノ上 A 遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』匹見町教育委員会
山根 航・植口英行編 2002『石ヶ坪遺跡発掘調査概報Ⅰ』島根大学法文学部考古学研究室
渡辺友千代編 1990『石ヶ坪遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代編 1991『水田ノ上 A 遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代編 1993『下手遺跡発掘調査報告書』匹見町教育委員会
渡辺友千代編 1997『田中ノ尻遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代編 2000『石ヶ坪A遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代編 2001『田屋ノ原遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代・栗田美文編 1999『中ノ坪遺跡』匹見町教育委員会
渡辺友千代・矢野健一編 1993『ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆田遺跡』匹見町教育委員会



1. 石ヶ坪遺跡 2. 森ノ前遺跡 3. 小松尾城址 4. 前田遺跡 5. 香正町遺跡 6. 長沢遺跡 7. 例戈山土地
 8. 水田ノ上遺跡 9. 下正ノ田遺跡 10. 長道遺跡 11. 石仏頭遺跡 12. 開古塚址 13. 神田遺跡 14. 笹田遺跡
 15. ヨレ遺跡 16. イセ遺跡 17. 門田遺跡 18. 下子遺跡 19. 和吉古墳

第1図 遺跡位置図

2. 過去の調査の概要

石ヶ坪遺跡は、現在までに匹見町教育委員会による二回の発掘調査と、島根大学考古学研究室による発掘調査が行なわれている。第1・2次調査については報告書（渡辺1990・2000）が、第3次調査では概報（山根他2002）が刊行されている。今回の調査は第3次調査に引き続き、島根大学考古学研究室の調査として行なわれたものである。ここでは上記の文献に基づき、過去の調査とその成果を概観してみることにする。また、第3次調査では明確に把握できなかった本遺跡の周辺地形や各調査区の位置関係の一部を、今回明らかにすることができた。しかし、第2次調査との位置関係がいまだ明確でないため、今回の結果をふまえ各調査区の位置関係を概念図として示しておく（第2図）。

第1次調査

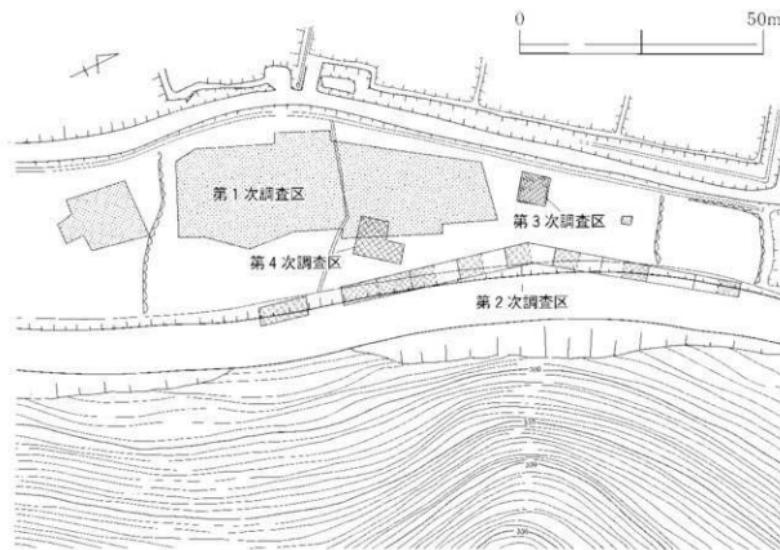
1989年4月10日から同年7月31日にわたって行なわれた。調査面積は約1,236m²で、A～H区までの調査区が設定された。第1次調査では、層位が1～5層まで確認された。それらのうち遺物包含層は3層であり、遺構の検出も3層中で行なわれている。しかし、調査の途中で保存が決定したため、完掘されたのはF2区のみで、その他の地区は完掘されていない。紙祖川の貢流により全体に層位が乱れている区があるが、旧河道と想定されるところ以外の層序は水平に堆積している。3層以下から、配石遺構、住居址、柱穴、土坑、溝状遺構、河床礫、石碑などが検出されている。F2区では、橢円形プランを呈する大型住居や配石遺構などが検出され、配石の下は保存のため調査されていない。遺物は主に縄文土器が出土し、その他に石器、陶磁器などが出土している。中でも中津式土器が多く出土しているが、中津式に後続するといわれる福田KII式は少ない。また、並木式や阿高式など九州系の滑石混入土器が交じっており、その他にも彦崎KI式と並行する小池原上層式、鎌崎式などの九州系の縄文土器が出土している。中津式と並木I・III式が同じ造構内で共存していることから、両者の時間的位置付けが問題とされている。

第2次調査

1999年4月16日から同年9月30日にわたって行なわれた。調査面積は約200m²で、A～I区までの調査区が設定された。調査の途中で保存が決定したため、II区は全域調査する一方、B区は調査しないなど不均一な調査となった。第2次調査では層位が1～7層まで確認されており、削平などのため均一な堆積ではないが、出土遺物から大別して三つの文化層に分けられている。1・2層は近世、3層・4層上位は中世前半、4層下位・5層は縄文時代の包含層である。縄文時代のものには、中期、後期、晚期の遺物、造構が存在し、造構は土坑、柱穴、配石遺構が検出されている。土坑には配石を伴うものと伴わないものの二つのタイプがあり、性格の違いが推察されている。出土した縄文土器は、中津式土器の比率が最も高く、九州系の滑石混入土器が1割程度交じる。また、石ヶ坪遺跡と同じ支流域である中ノ坪遺跡では、中期前葉に位置付けられる船元I・II式土器が出土している。このことから、中ノ坪遺跡は地理的にも石ヶ坪遺跡に何らかの影響を与えていたりと考えられている。しかし、石ヶ坪遺跡では船元I・II式はみられず、逆に並木式が中ノ坪遺跡でみられないことが指摘されている。このことから、並木式は船元式と並行するものではないという可能性が提示されている。

第3次調査

2001年8月20日から同年9月3日にわたって行なわれた。調査面積は36m²である。A～C-1～3区の調査区が設定された。以前の調査をふまえ配石遺構を詳細に調査し、その性格を解明すること、



第2図 第1～4次調査区配置概念図

縄文時代中期前葉から中期後葉の時期の九州系縄文土器と、在地系縄文土器の共伴関係を明らかにすることを目的として行なわれた。第3次調査では層位が1～5層まで確認された。後世の耕作による削平などで良好な遺物包含層には恵まれなかった。遺構検出面は4層上面であり、土坑6基、柱穴状造構9箇所が検出された。精査されたのは土坑5基であり、このうち4基が互いに切り合い、残りの1基は掘り返したような状態が確認された。土坑上の配石は削平のため確認できなかった。これらの土坑は、土坑萬あるいは貯蔵穴である可能性が示唆されている。土坑墓とした場合、短期間に互いに切り合う形で墓を構築するようなあり方は、埋葬小群と重ねて考えることができ、墓制研究に一石を投じるものである。主な遺物は縄文土器だが、ほとんどが細片であった。粗製で晚期前半を中心とするものである。第3次調査では、第1・2次調査で出土した並木式や阿高式といったような九州系縄文土器は出土せず、九州地方と中国地方の縄文土器の共伴関係を検討することはできなかった。これは、第3次調査区が遺跡の縁辺に位置するためと考えられる。しかし、九州地方との関係は姫島産黒曜石の剥片の出土により改めて確認された。今後、良好な遺物包含層をみつけること、遺存状態の良い遺構をみつけることが課題となった。

(日高 優子)

引用文献

- 山根 航・樋口英行編 2002『石ヶ坪遺跡発掘調査概報Ⅰ』島根大学法文学部考古学研究室
- 渡辺友千代編 1990『石ヶ坪遺跡』匹見町教育委員会
- 渡辺友千代編 2000『石ヶ坪A遺跡』匹見町教育委員会

第二章 調査の概要

1. 目的と経過

目的

今回の調査の目的は、第3次調査に引き続き、配石遺構の性格を明らかにすること、九州系縄文土器と在地系縄文土器の時間的な関係を明らかにすることである。

石ヶ坪遺跡やその周辺の遺跡では多くの配石遺構が検出されているが、その具体的な性格が明らかになっているものは少ない。したがって、配石遺構内の遺物がどのように分布しているかを詳細に調査することで、その時期および性格を明らかにすることを目的の一つとした。

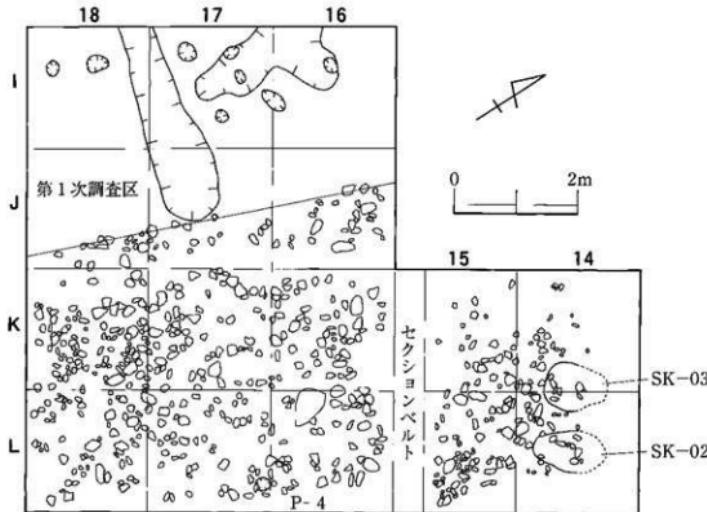
前章でも触れたように、石ヶ坪遺跡と中ノ坪遺跡での並木式土器と船元式土器の出土状況から、並木式土器が從来考えられていたように船元式並行ではない可能性が指摘されている。そして、石ヶ坪遺跡では縄文時代後期初頭とされる中津式土器と、並木式、阿高式土器が同一層内で共伴している。このことから渡辺氏は、並木式土器の時期が中期前葉ではなく中期中葉に下り、それに伴い並木式土器に統く阿高式土器の時期も中期後葉に下る可能性がでてくると論じている（渡辺2000）。このようない様な問題が発生しており、今回の調査では、これら九州系と在地系の縄文土器の共伴関係を明らかにすることも主要な目的とした。

また、第2次調査後の遺跡周辺の地形変化により、第1・2次調査区と第3・4次調査区との位置関係が明確でなかったため、それを明らかにすることも調査の目的の一つとした。

経過

石ヶ坪遺跡第4次調査は、2002年8月19日から同年9月9日にかけて行なわれた。発掘地点は第3次調査区の南側に位置し、発掘調査面積は64m²である。第3次調査区の列と行をのばしたラインを基準に調査区設定を行ない、それに従ったグリッド名を付した（第3図）。旧排土および1・2層は円匙によりまとめて掘り下げを行なった。3層以上の遺物は一括して取り上げ、4層以下の石器と2cm角以上の土器に関しては1点1点ポイントを落としながら取り上げた。

8月19日に機材搬入を行ない、20日にベンチマークおよび調査区を設定した。まず、第1次調査区との対応関係を把握するために、第1次調査のF2区の特殊遺構とトレンチの端をねらって、I～J-16～17区を設定し発掘した。ここからF2区のaトレンチが検出され、第1次調査区との位置関係を明らかにすことができたため、21日は調査区をI～L-16～18区に拡張して調査を行なった。また発掘調査と並行して遺跡周辺の地形測量を行なった。23日にK～L-16～18区に疊層を検出した。第1次調査で検出されている河床礫と同様の性格のものと考えられたが、配石遺構である可能性も想定されたため、固化を行なった。この日に地形測量を完了した。23日に、K～L-16区で検出された溝状遺構と考えられる黒色土を確認するため、24日にK～L-14～15区を拡張した。層位の確認のために、15区と16区の間に50cmのセクションベルトを残した。この溝状遺構と考えられた黒色土の堆積は、包含層が遺構のような状態に残っていただけであったことが判明した。27日にK～L-14～15区の4層から土坑1基とピット数基を検出し、L-14区から検出された土坑をSK-01とした。ピットの多くは樹根による擾乱と判断され、SK-01も樹根による擾乱か人為的なものかの判断が難しいと



第3図 調査区および遺構配置図

された。29日にSK-01の壁面観察による土層の堆積状況から、L-14区側に向かって包含層の堆積が厚くなることが予想されたので、層位の確認のためK-L-14区に幅1mのサブトレンチを設定し掘り下げた。そうしたところ、良好な包含層が確認されたため、サブトレンチと同じ深さまでK-L-14~15区全体を掘り下げるうことになった。K-L-16~18区は礫を取り上げながら掘り下げを行なった。30日に、K-L-14区に設けたサブトレンチの断面から土坑2基を検出した。それぞれ、L-14区で検出されたものをSK-02、K-L-14区で検出されたものをSK-03とした。その他にも土坑がいくつか確認された。9月3日にK-L-16~18区を引き続き掘り下げていたが、礫を取り除いた後の6層でピット4基を検出した。それぞれP-1~4としたが、P-4以外は樹根による攪乱と判断された。6層が包含層であるかなど、層位を検討するため、K-L-16区に幅1mのサブトレンチを設定し掘り下げを行なった。4日に、I-J-16~18区の埋め戻しを完了した。5日に、サブトレンチをK-L-16区全体に拡張しトレンチとして掘り下げ、そこから遺物が多く出土した。8日に現地説明会を行ない、その後に埋め戻し作業を行なった。K-L-14~15区は、限られた時間のため最下層まで掘り下がることができず、すべての土坑を完掘していないなどの課題を残した。そのため、第5次調査で再発掘を行なえるように土壟で遺構を保護したうえで埋め戻しを行なった。9日には、機材を撤収して今回の発掘調査を終了した。

当初、K-L-14~15区とK-L-16~18区で別々に遺構の番号をつけていたが、調査後、整理の過程で調査区全体を通じた遺構の番号をつけ直した。K-L-14~15区のP-3をP-1、P-5をP-2、P-6をP-3とし、K-L-16~18区のP-4はそのままP-4とした。最終的には、P-1~4まで確認されたことになった。

(日高 優子)

2. 基準土層

今回の調査では、調査区を第1次調査の発掘地点であるF2区と隣接する形で設定したため、第1次調査の排土と考えられる層が検出された。基準土層は、第1次調査、第2次調査、第3次調査の層位と対応させながら以下のように設定した（第4・5図、図版3～5）。

旧排土：第1次調査時の排土である。Hue10YR4/2灰黄褐色上層。粒子は細かく、粘性の弱いシルト質層である。L-16～17×、K-L-14～15×で確認された。

1層：耕作土の表土である。Hue10YR3/4暗褐色上層。粒子は細かく、粘性の弱いシルト質層である。第1次調査、第2次調査、第3次調査の1層に対応する。

2層：耕作土層である。Hue2.5Y3/3暗オリーブ褐色土層。粒子は細かく、やや粗い砂粒を含む。粘性を持つシルト質層である。第1次調査、第2次調査、第3次調査の2層に対応する。

3層：水田の床土である。Hue7.5YR4/4褐色土層。粒子は細かく、粘性の弱いシルト質層である。全体に酸化鉄の含浸がみられる。第1次調査との対応関係は不明で、第2次調査、第3次調査では3層に対応する。

4層：遺物包含層である。Hue10YR2/3黒褐色土層。粒子は極小で、粘性の弱いシルト質層である。上面からSK-01、P-1～3が検出されている。第1次調査の3層、第2次調査の5層に対応しており、第3次調査ではこの層は確認されていない。第1次調査の3層上位からは集石遺構、下位からは住居址が検出されている。第2次調査では配石遺構が検出されている。第1次調査、第2次調査とともにこの層より中津式土器や並木式、阿高式土器が出上している。

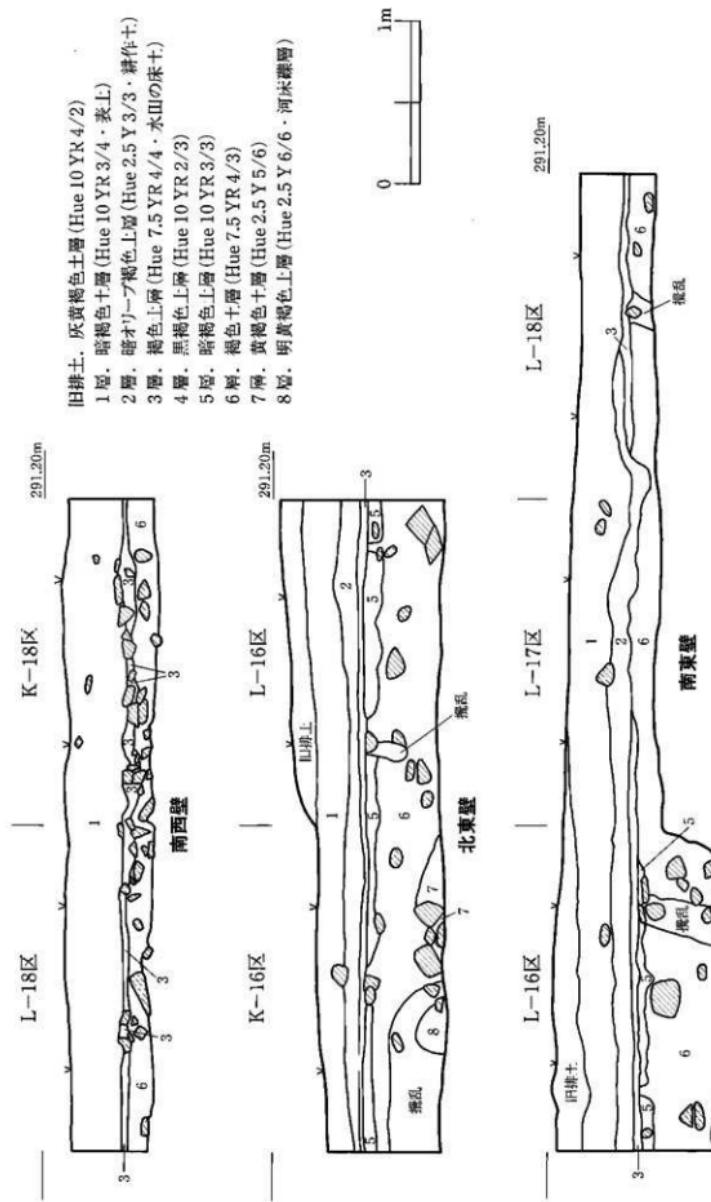
5層：遺物包含層である。Hue10YR3/3暗褐色土層。粒子は細かく、粘性を持つシルト質層である。4層とはもともと同一層であったが、土壤化の進行度合によって区別している。4層と同じく、第1次調査の3層、第2次調査の5層に対応する。第3次調査では、この層は確認されていない。

6層：遺物包含層である。Hue7.5YR4/3褐色土層。粒子は細かく、粘性を持つシルト質層である。層の上面に酸化鉄の含浸がみられる。礫を多く含む。今回の調査で遺物が最も多く出土した層であり、K-L-16～18×の疊群、P-4、K-L-14～15×のSK-02、SK-03もこの層中から検出されている。第1次調査の4層、第2次調査の6A層に対応する。第3次調査では、この層は確認されていない。

7層：第3次調査において遺構が検出された層である。Hue2.5Y5/6黄褐色土層。粒子は細かく、やや粗い砂粒を含む砂質層である。第1次調査の4層、第2次調査の6B層、第3次調査の4層に対応する。K-L-16×で確認された。

8層：河床疊層である。Hue2.5Y6/6明黄褐色上層。大粒の砂利を含む砂質層である。第1次調査の5層、第2次調査の7層、第3次調査の5層に対応する。K-16×で確認された。

この他に、K-L-16～18区北東壁、K-L-16～18区南東壁に擾乱層が確認された。Hue5YR4/4にぶい赤褐色土層で、粒子は細かく、粘性の弱いシルト質層である。



第4図 K~L-16~18区セクション図

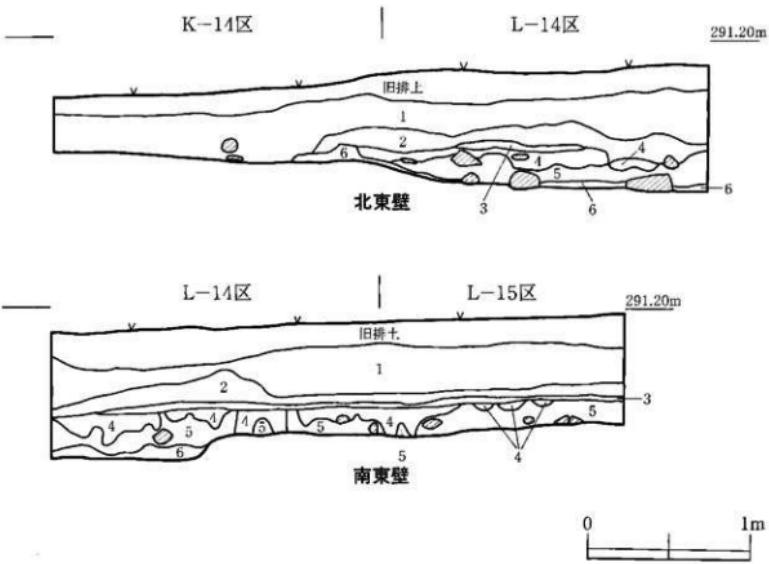
K～L-16～18区とK～L-14～15区は、50cmのセクションベルトをはさんで隣接している。しかし、層位の堆積状態が大きく異なっているため、調査区ごとに概要を記述していく。

K～L-16～18区

K～L-16～18区では、第1次調査時の排土が確認された。即ち排土はL-16区に堆積しており、L-17区に向かって消失している。その下から確認された1・2層は、礫をまばらに含んでおり、水平な堆積をしていた。3層は薄く水平に堆積しており、調査区のほぼ全域で確認されている。L-17区で途切れているが、おそらく上層からの掘削によるものであると考えられる。K～L-18区では、3層中に多量の礫が検出されている。これは、K～L-18区側の水田耕作時における掘削が4・5層をとぼし、その下の6層にまで達していたためであり、これらの礫群は、本米は6層に伴っていたものだと考えられる。遺物包含層である4・5層はほとんどみられず、K～L-16区に5層が薄く堆積しているのみであった。これも水田耕作時の掘削が原因であると思われる。その下の6層からは、礫群とともに多量の遺物が検出された。そのため、6層の性格をつかむ必要があり、K～L-16区にトレーニングを設けて掘り下げを行なった。その結果、6層は約40cmの厚い堆積をしており、遺物を多量に含んでいることが分かった。また、6層の上面には全面に酸化鉄が薄く含浸していた。さらに、6層中には樹根によるものと考えられる攪乱が多数確認され、北東壁、南東壁にみられる攪乱も同様の成因によるものであると推定される。6層からは、P-4が検出されている。7層および8層は、K～L-16区のトレーニング内で確認されたが、明確に上下の関係を示していなかった。しかし、第3次調査では4層と5層がSK-01の壁面と底面にそれぞれ確認されていることから、対応する7層と8層は上下関係にあるものと思われる。遺物は、5層からも出土しているが、大半は6層中から出土しており、一部7層上面からも出土が認められた。また、K～L-16区に設けたサブトレーニング内の6層上面まで掘り下げており、その他は6層の途中で掘り下げを止めている。

K～L-14～15区

今回遭構が検出されたK～L-14～15区では、全面に第1次調査時の排土が堆積していた。その下から検出された1・2層は厚く堆積していたが、K-14区では1層が大きく落ち込んでおり、2層以下が消失していた。おそらく上部からの掘削によるものと考えられる。その下の3層は薄く水平に堆積していた。しかし、3層はK～L-14区側では一部しか残っておらず、上部からの掘削によって消失したのだと思われる。遺物包含層である4・5層は、K～L-16～18区と比べて厚い堆積がみられ、厚さは約20cmを測る。4層はかなり不規則な様相を呈しているが、これは土壤化の進行度合によるものだと考えられる。4・5層は、K～L-16～18区と同様に、水田耕作時の掘削によって上部が消失している。4層上面からは、SK-01、P-1～3、ピット数箇所が検出されている。6層は上面を確認した段階で、層位の確認のためK～L-14区にサブトレーニングを設けた。しかし、途中でサブトレーニングの断面からSK-02とSK-03が検出されたため、掘り下げを止めている。6層上面には、まばらに礫が検出されているが、K～L-16～18区のような多量の礫群は確認されず、逸いがみられる。しかし、両区の礫群の関係は明らかにできなかった。上面には薄く酸化鉄が含浸していた。また、セクション図にはでていないが、SK-03の北東側の底面から7層が確認されている。K～L-14～15区の遺物は、ほとんどが4・5層から出土しており、滑石混入土器も出土している。また、6層からの出土も認められた。



第5図 K～L-14～15区セクション図

今回の調査では、第1次調査、第2次調査の遺物包含層が確認され、その対応関係を明らかにすることことができた。しかし、その下に確認された6層は、全調査区を通して堆積しており、なおかつ層内に遺物を多量に含んでいたため、その性格を明らかにすることが必要とされた。6層は第1次調査の4層、第2次調査の6A層と対応する。しかし、過去の調査では層内に遺物をほとんど含んでいないのに対し、今回の調査では、遺物が多く出土しているという違いがみられる。また、6層の上面には多量の礫が検出されているが、K～L-16～18区とK～L-14～15区では、隣接しているのにも関わらずその分布の様相が多少異なっていた。

以上、第4次調査の層位は、水田耕作による搅乱、樹根による搅乱などにより、必ずしも良好な状態ではなかった。次回の調査では上記の問題点をふまえ、石ヶ坪遺跡における基準上層の対応関係をより明確化し、層位形成の要因が如何なるものであるかを明らかにしていく必要があるだろう。

(稲田 陽介)

3. 遺構と遺物の検出、出土状況

今回の調査では、土坑1基、上面に礫群を伴う土坑2基、柱穴状造構4箇所、多量の礫が検出された。ここでは、調査区ごとに検出状況を記述し、概要を説明する。また、礫群に伴う土坑2基についてはそれぞれ記述する。

K~L-16~18区（第6図、図版5）

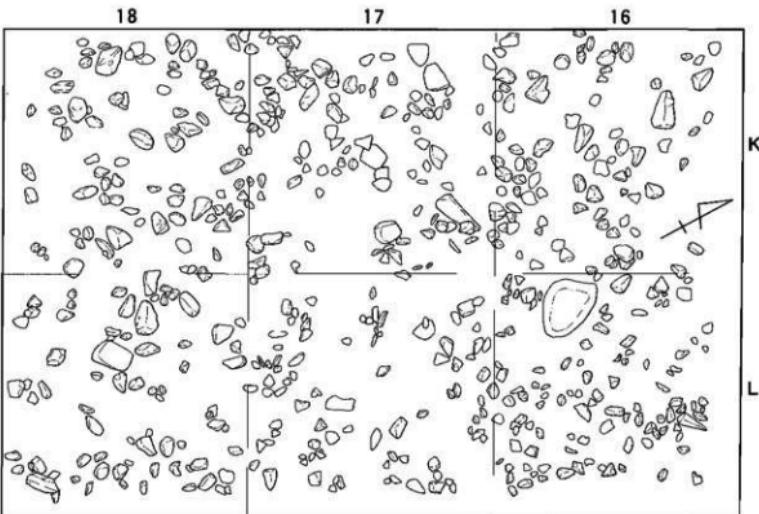
K~L-16~18区は、第1次調査のF2区に隣接して設定された。本調査区では、6層中より礫群と柱穴状造構が1箇所検出された。6層の上部では、礫の堆積が調査区全面を厚く覆っている。そのため、礫群の検出を上部と下部の二回に分けて行なった。

礫群の検出状況は、上部礫群では下部礫群と比べて小さな礫が多く、K~L-18区では、人形の礫が多い傾向にあるが、それに比べてK~L-16区側は礫が小さく、また少ない傾向がみられる。K~L-18区では20~30cm大の礫が円形をなしているように思われる。下部礫群では、上部礫群と比べて大きな礫が散在している。K~L-17~18区では、上部礫群と同様に礫が円形をなしていると思われる部分が数箇所ある。円形をなしているように思われる礫群からは、遺構の検出や遺物の出土がみられない。また周辺に礫が多いため、礫群の範囲がどこまでおよぶか確認することは難しい。上部礫群、下部礫群を通じてK~L-17~18区は、礫が多く、酸化鉄の含浸が著しい。それに比べてK~L-16区側は、礫が少なく、酸化鉄の含浸が小さい。また、L-16区には3層から6層下部付近にまで達する厚さ約50cmもあるひときわ人形の石が検出された。この石は上面が扁平であり、台石として利用された可能性がある。

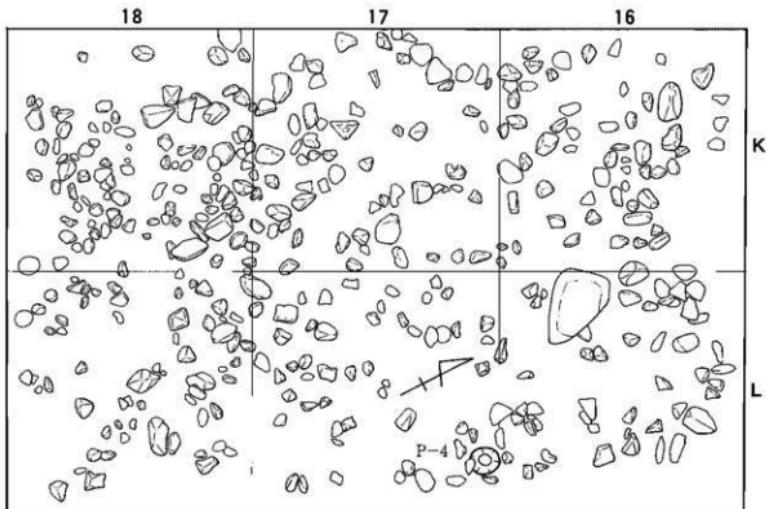
礫群の下からピットが4箇所検出された。そのうち1箇所は形状が円形であることから、柱穴状造構と判断され、P-4とした。他の3箇所は樹根による攪乱とされた。また、周辺には多数の木の根による攪乱が確認されており、P-4に関しても樹根による攪乱である可能性がある。P-4からは土器が1点出土している。P-4は、第6図の下部礫群に図示している。

出土遺物に関して記述すると、K~L-16~18区の出土と確認できる遺物の総数は、土器849点、石器138点である。3層からは土器117点、石器48点、5層からは土器200点、石器42点が出土した。加えて壁清掃時に出土した土器は64点、石器14点である。6層の上部では、土器191点、石器19点が出土しており、そのうち出土位置が確認されたものは土器32点、石器1点である。6層の下部および7層の上面では、土器277点、石器15点が出土しており、そのうち出土位置が確認されたものは土器76点、石器7点であった。6層の下部および7層上面から出土した土器は、すべてK~L-16区に設定されたサブトレチ内から出土したものである。6層は7層上面に近づくほど、土器の出土が多くなるという傾向があり、またサブトレチ内からは比較的大きな土器片の出土が多くみられる。6層出土の土器は、ほとんどが細片であり、その中には数点磨滅している土器もみられる。出土位置が確認できた土器片の中には、接合する資料ではなく、同一個体と考えられる資料もみられなかった。これらの出土遺物の大半は、5mmメッシュのふるいにかけることによって回収されたものである。

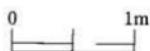
（小池 康明）



上部礫群



下部礫群



第6図 K~L-16~18区 6層中礫群実測図

K~L-14~15区（第7図、図版6）

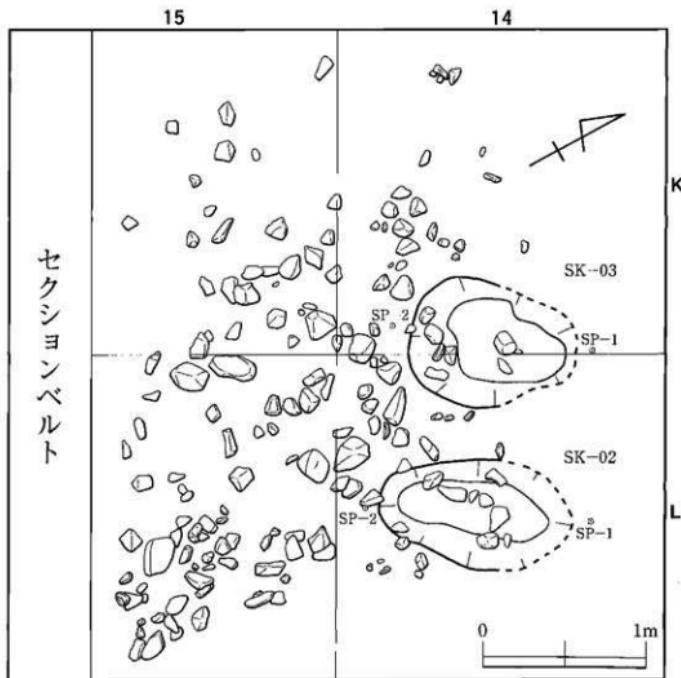
K~L-14~15区はK~L-16~18区に隣接しており、土坑3基、柱穴状造構3箇所、礫群が検出された。土坑は、4層上面から検出されたものをSK-01、6層上面から検出されたものをSK-02、SK-03とし、調査を行なった。SK-02・03は、層位確認のためK~L-14区に1m×4mにあけたサブトレーンチの断面から、土坑の立ち上がりが確認されたことによって認識された。柱穴状造構は4層上面、礫群は6層上面から検出された。第7図に図示されたものは6層上面の状況である。

SK-02はL-14区で検出され、SK-03はK~L-14区で検出されている。これらの土坑は礫群を上部構造とするような形で存在していた。SK-02・03は平面プランからの検出が難しく、K~L-14区にサブトレーンチを入れるまで確認できなかった。礫群下には今回検出された土坑以外にも、土坑と考えられるプランがいくつか確認されている。今回は発掘日程の関係により、SK-02・03以外の礫群下面の土坑まで調査を行なうことができなかつたが、第5次調査において改めて確認を行なう予定である。SK-02・03の詳細に関しては後述する。

礫群は、明確ではないが、楕円形状のプランを呈していると思われる。河原石と考えられる10~20cmの円礫群が、それほど高くない密度でL-15区を中心に楕円形状に集まっている。しかし、サブトレーンチ部が他の地点より掘り下げが進んでおり、その部分の円礫が取り除かれてしまったことで、礫の密度に差がでている可能性がある。K~L-14~15区の4・5層は、K~L-16~18区よりも厚く堆積している。しかし、K-14区側の4・5層は消失してしまっているなど、上部からの削平により調査区ごとの堆積に差がみられる。このようなK~L-16~18区からK~L-14~15区にかけての4・5層の堆積の不均一さから、礫群の上部は水田耕作時の掘削によって消失している可能性がある。

K~L-14~15区の4層上面では、土坑1基とピット10箇所が検出された。それについて精査が行なわれ、L-14区で検出された土坑はSK-01とされた。壁の立ち上がりの状態などから、柱穴状造構の可能性が考えられるものをP-1~3とした。その他のピットは、形状や周囲の擾乱状況などから、ほとんどが樹根による擾乱と判断された。SK-01は上部に数個の円礫を持ち、平面プランはいびつな形を呈する。長軸長約60cm、短軸長約50cm、土坑最深部の深さは確認面より約30cmを測る。土坑がいびつな形を呈するのは、4層以下の層に礫が多いためであると考えられる。SK-01が遺構であるのか、樹根による擾乱であるのかの判断は難しいため、これら4層上面の遺構に関しては図示していない。

K~L-14~15区でSK-02・03以外より出土した遺物の総数は、土器367点、石器89点である。出土遺物の総数のうち、旧排土および1・2層から出土したものが土器8点、石器5点、3層からが土器67点、石器20点である。4・5層では、土器228点、石器58点が出土し、そのうち出土位置が確認できたものが土器16点、石器3点である。4・5層で出土位置が確認できた土器のうち、2点は滑石混入土器であった。4・5層で出土位置が確認できた石器はすべて姫島産黒曜石の剥片であり、そのうち2点が第13図-38・40に図示されている。遺構確認面である6層からは土器38点、石器4点が出土し、そのうち出土位置が確認できたものが、土器6点、石器1点である。土器は3点が、第9図-5・21、第10図-39に図示されている。5と21は同一個体と考えられ、出土地点も近接している。これらの2点の土器は、サブトレーンチ内のSK-03の周辺から出土しており、土坑に伴うものである可能性もある。石器は石錘であり、第16図-75に図示されている。その他に、壁清掃上から土器が19点



第7図 K～L-14～15区遺構配置図

出土している。また、4層で確認されたSK-01からは上器4点、石器1点、ピットの中から、上器3点、石器2点が出土している。これら出土遺物の大半が、5mmメッシュのふるいにかけることにより回収されたものである。

出土した中で、接合するような上器は存在せず、同一個体と考えられるようなものもほとんどなかった。K～L-14～15区では、特に遺物が密集して出土するような状況はなかった。また、磨滅をうけた遺物が半数を占め、同一個体がほとんど存在しないこと、6層上面の搅乱などを考え合わせると、原位置を保っている遺物はあまり存在しないと推定される。

(日高 優子)

SK-02 (第8図、図版7・8)

SK-02は、L-14区で検出された。K-L-14区のサブトレンチを入れた後に上坑が確認されたため、正確な平面プランは不明であるが、楕円形を呈する。土坑の長軸方向は、北方向を基準とするとN31°Eである。規模は、確認面で長軸長が約119cm、短軸長が約69cm、底面では長軸長が約91cm、短軸長が約33cm、深さは確認面より最深部約25cmである。土坑壁の傾斜については、北東側はサブトレンチを入れたためほとんど残っておらず、詳細は不明だが、南西側は比較的緩やかな角度で掘り込まれている。埋土は1層のみであり、土器と15cm前後の礫が検出された。色調はHue2.5YR3/6の明赤褐色土層で、粒子は細かく、やや湿り気を帯びたシルト質層である。粘性は普通である。

本土坑からは土器が17点出土しており、出土位置を確認できたものは12点である。そのうち図示したものは第9図-12、第10図-58の2点である。土器の出土位置は、平面プランにおいては礫付近に集中している。また、出土レベルも底面から浮いた形で出土している。土坑内から礫が多景に出土しているが、意図的に埋められたものなのか、落ち込んだものなのか確認できなかった。(稻田 陽介)

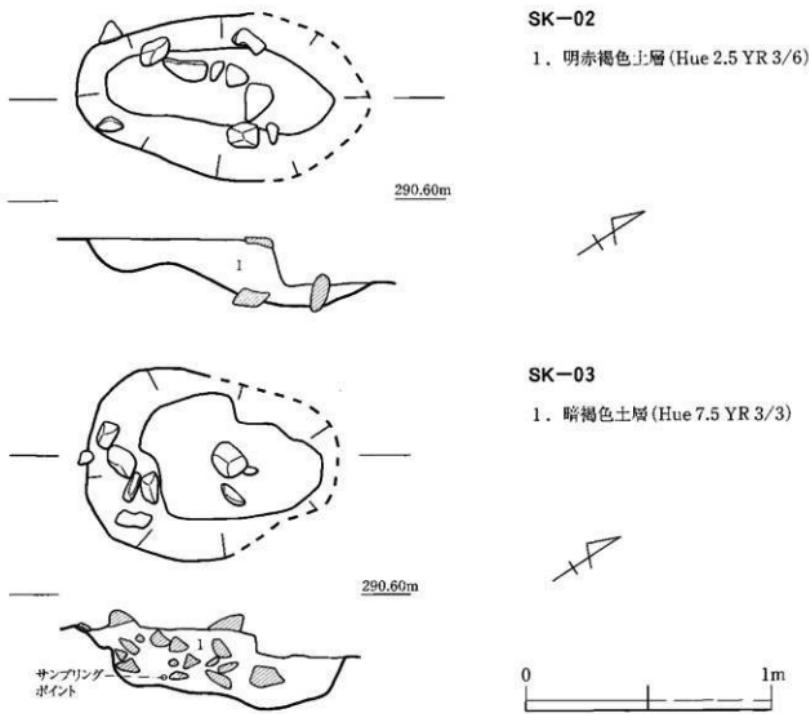
SK-03 (第8図、図版8・9)

SK-03は、K-L-14区で検出された。SK-02と同様に正確な平面プランは不明だが、不整形円形を呈すると考えられる。土坑の長軸方向は、北方向を基準とするとN35°Eである。規模は、サブトレンチに切られているため明確ではないが、現状での確認面の長軸長は約100cm、短軸長が約79cm、底面では長軸長約68cm、短軸長が約51cm、土坑最深部の深さは確認面より約30cmである。土坑壁の傾斜については45°から79°の間になるものと考えられる。SK-03の北東側の底面は7層まで達している。SK-02と比較してSK-03の底面は広く、その分、上坑の立ち上がりは急な角度になっている。SK-03は土坑上に数個の礫を伴っている。また、土坑内には非常に多くの礫が入っている。

遺物は、土器が8点出土しており、そのうち出土位置を確認できたものは4点である。図示されているものは、第10図-48である。埋土は1層のみである。色調はHue7.5YR3/3暗褐色土層を呈し、粒子は極小のシルト質層であり、粘性は弱い。また、リン酸分析のためにSK-03の底部付近からサンプリングを行なった。

以上、遺構と遺物の検出、出土状況について述べてきた。上述した土器以外に、I-L-16-18区の旧耕土および1・2層から土器93点、石器20点、J-16-18区の4層から土器51点、石器9点、6層から土器4点が出土している。出土土器の中では、第9図-5・21が同一個体と考えられるが、他に接合する資料や同一個体と考えられる資料はほとんどみつかっていない。また、土器の出土地点に関しては特に集中するような傾向はみられなかった。

今回の調査では、K-L-17-18区には礫が円形をなしていると思われる部分があり、K-L-14-15区には楕円形プランを呈すると考えられる礫群が検出された。各調査区の礫の分布状況は、調査区が隣接しているのにも関わらず、異なる様相を呈していた。K-L-16-18区では、調査区全面に礫が分布しているが、これに対してK-L-14-15区では、調査区の中心付近に礫が集まっており、その周辺にはあまりみられなかった。礫群下面から検出されたSK-02・03に関しては、楕円形のプランを呈する礫群の縁辺に位置しており、SK-02・03は礫群に伴うものであると考えられる。SK-02とSK-03は規模、形状ともに近似しており、長軸方向もほとんど同じである。また、埋土はとも



第8図 SK-02・03遺構実測図

に1層で土坑内に多量の礫を含んでいる。以上のように、SK-02とSK-03の様相は非常に類似しているといえる。土坑内の遺物の出土状況は、SK-02は出土数が多く、土器片が集中して出土している。しかし、SK-03は土器の出土数自体が少なく散在している。

今回の発掘調査では、礫群下にSK-02・03以外に土坑を数基確認しているが、発掘日程の関係により調査は行なっていない。第5次調査に継続する必要がある。

(小池 康明)

引用文献

渡辺友千代編 2000『石ヶ坪A遺跡』匹見町教育委員会

第三章 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器1747点、石器342点、陶磁器3点である。4層以下の石器と2cm角以上の土器については全点ポイントをとり、それ以外の遺物については、一括して取り上げた。排土はすべて5mmメッシュのふるいにかけた。縄文土器は大部分が細片であり、ここでは比較的残りのよいものを図示した。なお、縄文土器の時期的問題については第四章の考察において述べることとする。

1. 縄文土器（第9・10図、図版10・11）

土器の出土位置は次の通りである。I~L-16~18区では、旧排土および1・2層から第9図-1・4・13・18・28、第10図-50・56が出土している。K-L-16~18区では、3層から第9図-3・7・9・19・31、第10図-38・44・45・51が、5層から第9図-16、第10図-42・46・59が、6層から第9図-2・6・8・10・14・17・20・22・25・27・29・30・32・34、第10図-37・40・41・43・47・49・51~53・55・57・60~63・65・66が、歯清掃土から第9図-15・24、第10図-64が出土している。K-L-14~15区では、SK-02から第9図-12、第10図-58が、SK-03から第10図-48が、6層から第9図-5・21・26・33・36、第10図-39が出土している。

その他に表探で第9図-11・35が、旧排土および1・2層から第9図-23が出土している。

分類の概要

出土した縄文土器1747点のうち、比較的残りのよい縄文土器66点に関して資料整理を行ない分類した。まず、土器の部位によって、口縁部、胴部、底部に分けた。口縁部は、口唇部文様から、I刻み目、II押引文、III無文の3類に分けた。つぎに、A地文に縄文を持つもの、B地文に縄文を持たないものに分け、さらに、a有文、b無文に分けた。胴部は、A地文に縄文を持つもの、B地文に縄文を持たないものに分け、さらに、a有文、b無文に分けた。底部4点については、資料数がわずかなため分類を行なわなかった。以上の分類に従って、各土器について記述を行なうこととする。

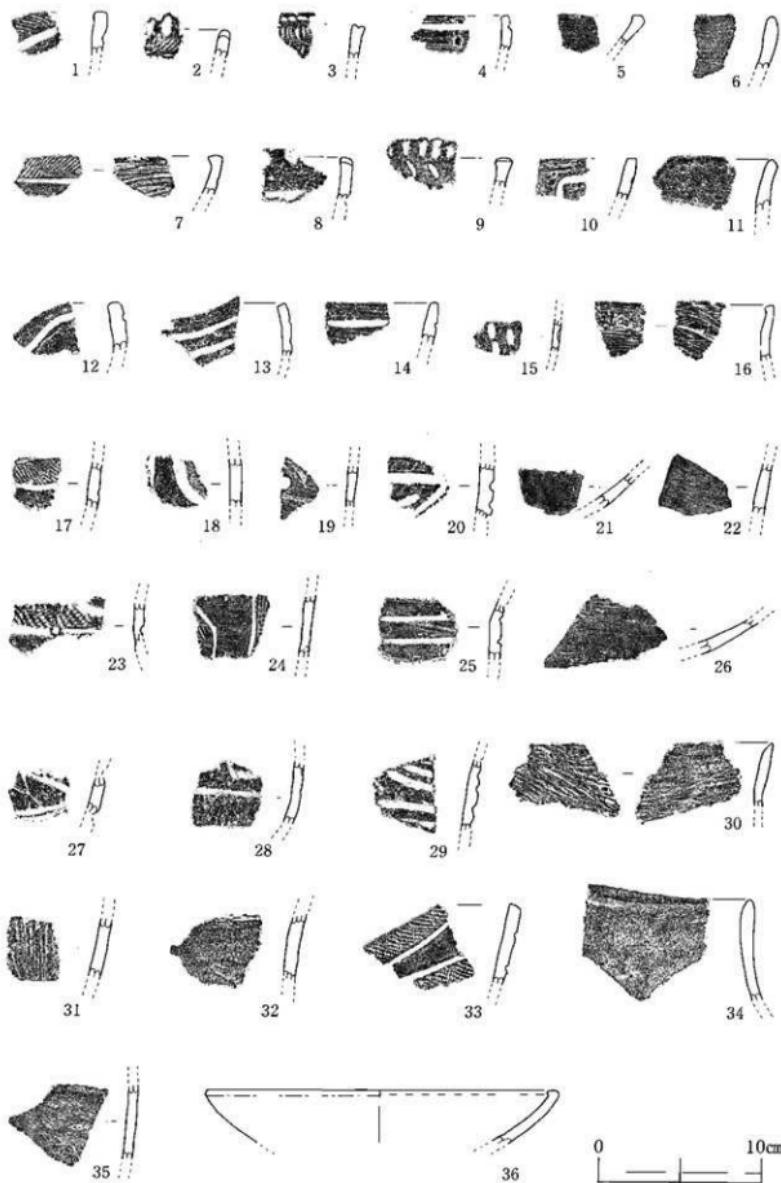
口縁部

I-A-a類（第9図-2）

第9図-2は口唇部に棒状工具で刻み目が施される。口縁外器面端部に単節LR縄文がみられ、沈線は棒状工具により施文される。内器面はナデ調整される。胎土中に2mm程度の長石、石英、黒雲母が含まれ、色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が橙色を呈する。

I-B-a類（第9図-8・9）

第9図-8の口唇部には棒状工具で太い刻み目が、外器面には横位の沈線が施文される。内外器面とともにナデ調整され、色調は外器面がにぶい褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。胎土中に滑石、黒雲母を含む。9の口唇部の刻み目と外器面の刺突は棒状工具で施文される。刺突は、確認できる2箇所の他に下部にもあるが、大部分が割れていて図面では確認できない。胎土中に1mm程度の長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。



第9図 出土土器実測図（1）

II-B-a類（第9図-3）

第9図-3は口唇部に細い棒状工具による押引文がみられる。口縁外器面端部は連続した爪痕状の文様が施される。内外器面ともにナデ調整され、色調は黒褐色を呈する。胎土中に多量の滑石を含む。

III-A-a類（第9図-1・7・12・33）

第9図-1・33は単節 RL 繩文が、7・12は単節 LR 繩文が施され、沈線はすべて棒状工具で施文される。1は内外器面ともにナデ調整され、胎土中に2mm程度の長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面が橙色、内器面が明褐色を呈する。7は口唇部が内側に肥厚している。外器面はナデ調整で、内器面は只殺条痕がみられる。胎土中に1mm程度の長石、石英を含み、色調は内外器面ともに、にぶい褐色を呈する。12は内反した波状口縁であり、緩やかに立ち上がる。胎土中に1mm程度の長石、黒雲母を含む。内外器面ともにヘラミガキで調整され、色調はにぶい黄褐色を呈する。33は波状口縁の磨消繩文土器と考えられる。外器面はナデ、内器面はヘラミガキで調整される。胎土中に1mm程度の長石、石英、金雲母を含む。色調は外器面が赤褐色、内器面が明赤褐色を呈する。

III-B-a類（第9図-4・10・13・14）

第9図-4・10・13・14はすべて棒状工具で施文される。4は沈線内に原体の稜線がみられ、内外器面ともにヘラミガキで調整される。胎土中に1mm程度の長石、石英を含む。色調は外器面が褐灰色、内器面が褐色を呈する。10は内外器面ともにナデ調整され、胎土中に1mm程度の長石、石英、黒雲母を含む。外器面に鉄分が付着している。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が明黄褐色を呈する。13は波状口縁の波頂部付近であり、3本の沈線が口縁に平行して施文される。外器面はナデ、内器面はヘラミガキで調整される。胎土中に長石、黒雲母、金雲母を含む。色調は外器面が明褐色、内器面がにぶい褐色を呈する。14は沈線が口縁に平行して施文される。内外器面ともにヘラミガキで調整される。胎土中に長石、石英、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい橙色、内器面が橙色を呈する。口縁付近に煤が付着している。

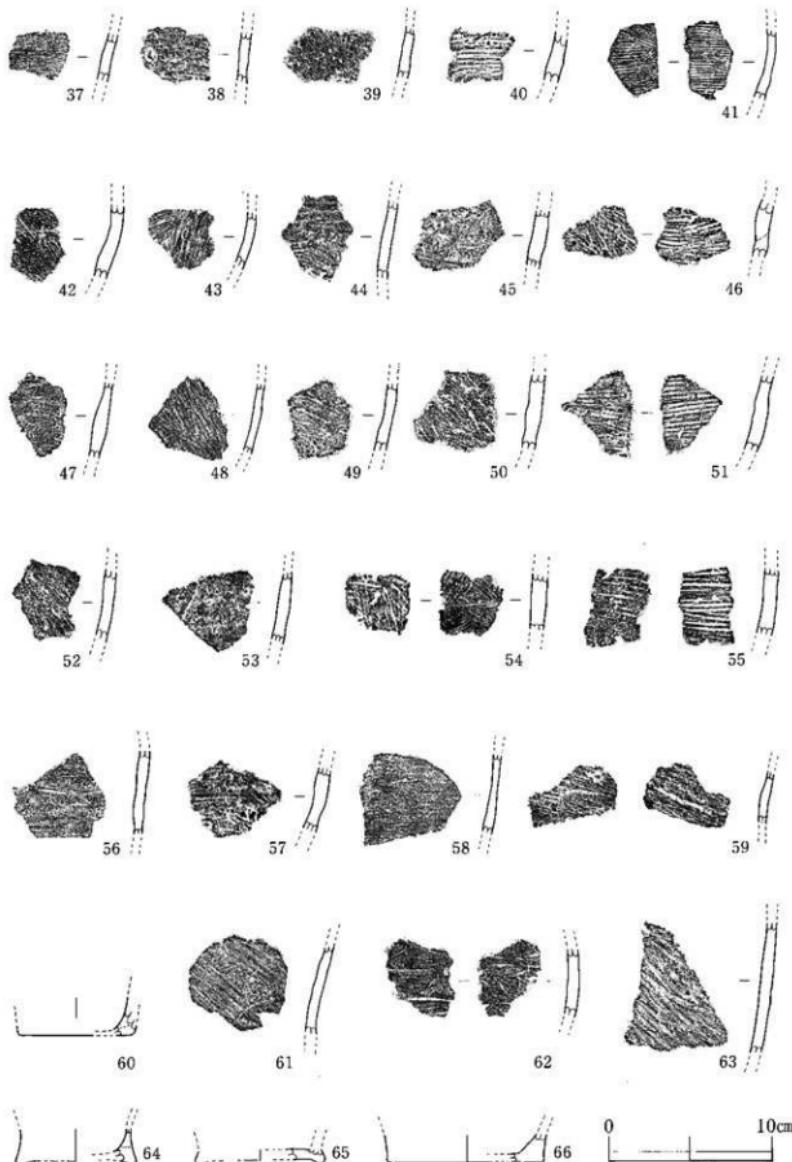
III-B-b類（第9図-5・6・11・16・30・34・36）

第9図-5は黒色磨研土器の浅鉢で、内外器面ともに丁寧なヘラミガキで調整される。胎土中に1mm程度の長石、石英、金雲母を含む。内器面に鉄分が付着している。色調は外器面が暗赤褐色、内器面がにぶい赤褐色を呈する。21と同一個体である。6は浅鉢で、内外器面ともにヘラミガキで調整され、色調は明黄褐色を呈する。胎土中に1mm程度の長石、黒雲母を含む。11は磨滅しており、色調は内外器面ともに橙色を呈する。胎土中に2mm程度の長石、石英を含む。16・30は内外器面ともに磨減しているが条痕がみられる。16は胎土中に1mm程度の長石を含む。色調は外器面が橙色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。30は胎土中に大粒の長石を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が黄褐色を呈する。34は内外器面とともにヘラケズリの後、ナデ調整される。胎土中に1mm程度の長石、石英、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が灰黄褐色を呈する。36は復元径が約21.6cmの浅鉢と考えられる。内外器面ともに丁寧なヘラミガキで調整される。胎土中に2mm程度の長石、黒雲母、金雲母を含む。色調は外器面が橙色、内器面が明褐色を呈する。

胴部

A-a類（第9図-17・18・23・24）

第9図-17・24は単節 RL 繩文が、18・23は単節 LR 繩文が施され、このうち18・24は充填繩文で



第10図 出土土器実測図（2）

ある。17は棒状工具で横位の沈線が施文される。外器面は磨滅、内器面はナデ調整される。胎土中に2mm程度の長石、石英を含む。色調は外器面が明褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。18は棒状工具で縦に太い沈線がみられる。内器面はナデ調整され、鉄分が付着している。胎土中に1mm程度の長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面が黄褐色、内器面が暗灰黄色を呈する。23は浅い沈線が横位に施文される。沈線内に先のとがった工具で刺突が施されており、断面は一角形である。内器面はヘラミガキで調整され、胎土中に1mm程度の長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面が褐灰色、内器面がにぶい橙色を呈する。24の沈線は棒状工具で縦に細く施文される。外器面は磨滅し、内器面はヘラミガキで調整される。胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は内外器面ともに橙色を呈する。

B-a類（第9図-15・19・20・25・27～29・32）

第9図-15は指頭による凹点が、19・20・25・27～29・32は棒状工具による沈線が施文される。15の器壁は非常に薄い。胎土中に1mm程度の長石を含む。内外器面ともにナデ調整され、色調はにぶい褐色を呈する。19は補修孔がみられる。内外器面ともにヘラミガキで調整される。胎土中に大粒の長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が褐色を呈する。20は内外器面ともに磨滅し、胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面が黄褐色、内器面が明黄褐色を呈する。25・27は沈線が横位に施文される。25は胎土中に2mm程度の長石、石英を含む。内外器面ともにナデ調整され、色調は橙色を呈する。27は内外器面ともに磨滅しており、胎土中に多量の滑石を含む。色調は外器面が橙色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。28は外器面がやや磨滅しているが、沈線が浅く施文されており、内器面は縦に条痕がみられる。胎土中に1mm程度の長石、石英、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい赤褐色、内器面が明褐色を呈する。29は多条の沈線が横位に施される。内器面はナデ調整され、胎土中に大粒の長石、石英を含む。色調は内外器面ともに、にぶい黄橙色を呈する。32は上端部に細い沈線が施文され、外器面はヘラミガキ、内器面はヘラケズリで調整される。胎土中に長石、石英、金雲母を含む。色調は外器面が明黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。

B-b類（第9図-21・22・26・31・35、第10図-37～59・61～63）

第9図-21・22・26は黒色磨研土器である。21は浅鉢で、内外器面ともにヘラミガキで調整される。胎土中に金雲母を含む。色調は外器面が暗赤灰色、内器面がにぶい橙色を呈する。22は内外器面ともにヘラミガキで調整される。胎土中に長石、石英を含む。色調は外器面が暗オリーブ褐色、内器面がオリーブ黒色を呈する。26は浅鉢底部付近と考えられる。外器面はヘラミガキで調整され、内器面は粗いヘラミガキの後、ナデ調整される。胎土中に石英、黒雲母を含む。色調は外器面が黒褐色、内器面がにぶい赤褐色を呈する。31の外器面は粗いハケ、内器面はナデ調整される。色調は外器面が赤褐色、内器面が赤灰色を呈する。胎土中に多量の滑石を含む。35の外器面はヘラケズリ、内器面はヘラミガキで調整され、色調は黒褐色を呈する。胎土中に多量の滑石を含む。第10図-37の内器面はナデ調整され、色調は外器面が褐灰色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。胎土中に長石、石英を含む。38は内外器面ともに粗いヘラミガキで調整され、胎土中に少量の滑石、石英を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が褐灰色を呈する。39の外器面は磨滅しており、内器面はナデ調整される。胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は内外器面ともに橙色を呈する。40・41は内外器面ともに条痕がみられ、40は胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面が橙色、内器面がにぶい赤褐色を呈する。41は胎土中に長石、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が灰黄褐色を

呈する。42は内外器面ともにナデ調整され、色調はにぶい橙色を呈する。胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。43の外器面は条痕がみられ、内器面は磨滅している。胎土中に長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい赤褐色、内器面が赤黒色を呈する。44は内外器面ともに磨滅している。胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が黒褐色を呈する。45は内器面に条痕がみられ、胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は内外器面ともに、にぶい黄橙色を呈する。46は内外器面ともに条痕がみられ、一部にナデ調整がみられる。胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は内外器面ともに橙色を呈する。47の外器面はナデ、内器面はヘラミガキで調整され、胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面が褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。48は内外器面ともにヘラミガキで調整され、胎土中に長石、石英を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が黄褐色を呈する。49の外器面は粗いヘラミガキ、内器面はナデ調整され、胎土中に長石、石英、黒雲母、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄橙色、内器面が黄橙色を呈する。50の外器面はハケ、内器面は粗いヘラミガキで調整される。胎土中に長石、石英、黒雲母を含み、色調は内外器面ともに灰黄褐色を呈する。51は内外器面ともに条痕がみられ、色調は橙色を呈する。胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。52・53は内外器面ともに磨滅している。52は胎土中に長石、石英、金雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が暗灰黄色を呈する。53は胎土中に長石、石英、黒雲母を含み、内外器面ともに鉄分が付着している。色調は外器面が黄褐色、内器面がにぶい黄褐色を呈する。54は内外器面ともに粗いヘラミガキで調整され、胎土中に長石、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい褐色、内器面が褐色を呈する。外器面には赤色顔料、鉄分が付着している。55は内外器面ともに条痕がみられ、色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土中に長石を含む。56の外器面はヘラミガキで調整され、内器面は磨滅している。胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面が暗灰黄色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。57は内外器面ともに条痕がみられ、色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が明褐色を呈する。胎土中に長石、石英、黒雲母を含み、内外器面ともに鉄分が付着している。58は内外器面ともにヘラミガキで調整され、色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土中に長石、石英、金雲母を含む。内外器面ともに鉄分が付着している。59の外器面は条痕がみられ、内器面は粗いヘラミガキで調整される。胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面がにぶい黄褐色、内器面が黄褐色を呈する。61の外器面は条痕がみられ、内器面はヘラミガキで調整される。胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は外器面が明黄褐色、内器面がにぶい黄橙色を呈する。62は内外器面ともに粗いヘラミガキで調整され、色調は橙色を呈する。胎土中に長石、黒雲母を含む。63は内外器面ともに条痕がみられ、色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土中に長石、石英、黒雲母、金雲母を含む。

底部（第10図-60・64～66）

底部の復元径は、第10図-60が約7.2cm、61が約7.4cm、65が約8.0cm、66が約9.6cmである。60は平底であり、内器面はヘラミガキで調整され、色調は内外器面ともに、にぶい黄橙色を呈する。胎土中に長石、石英、金雲母を含む。64は上げ底であり、色調は外器面がにぶい赤褐色、内器面が橙色を呈する。胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。65は接合部ではがれており、また上げ底の底面周縁部には刻み目がみられる。胎土中に長石、黒雲母を含む。色調は外器面が暗灰黄色、内器面がにぶい黄色を呈する。66は平底であり、全体的に磨滅している。胎土中に長石、石英、黒雲母を含む。色調は内外器面ともに、にぶい黄色を呈する。

（小林 大樹）

2. 石器（第11～16図、図版12～15）

本遺跡より出土した石器類の総数342点のうち、79点を掲載する。石錐40点（未製品を含む）、石核4点、スクレイバー類3点、石錐1点、打製石斧6点、石錐21点、磨石・敲石類4点について図示した。磨石・敲石類は、両用された場合も考えられることから同分類で整理した。

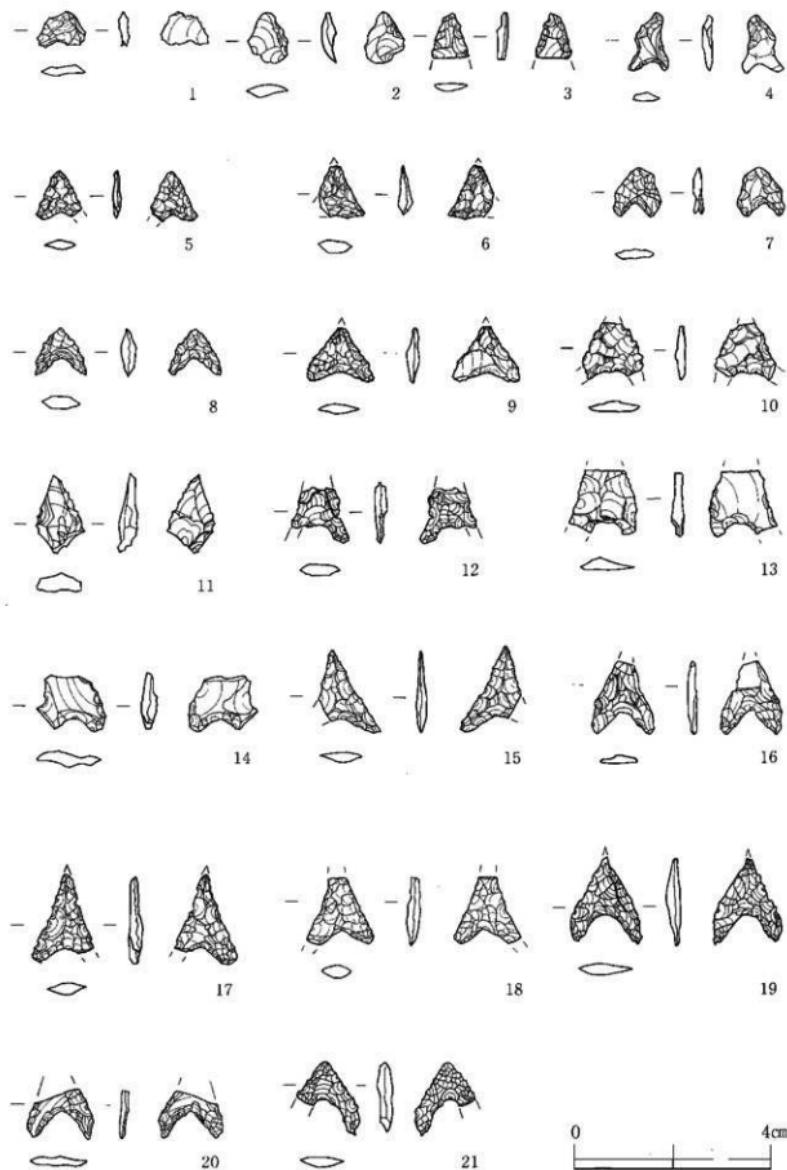
石器の出土位置は次の通りである。K～L-16～18区では、3層から第11図-13・14・16・17・20、第12図-28・33・36、第13図-39、第14図-48・53・54、第15図-69、第16図-71・72・74が、5層から第11図-1、第12図-31が、6層から第11図-4、第14図-51・52、第15図-62が、壁清掃土から第11図-2・5・10、第14図-46が出土している。K～L-16区では、6層から第11図-15・19、第12図-27、第14図-47・49、第15図-58・59・68、第16図-73・76・78が、壁清掃土から第15図-61が出土している。J-16～18区では、5層から第12図-24が出土している。I～L-16～18区では、旧排土および1・2層から第11図-12、第12図-32・34・35、第13図-43・45が出土している。K～L-14～15区では、旧排土および1・2層から第11図-18、第12図-30、第13図-41、第15図-60が、3層から第11図-7・9・11、第12図-23・26が、4・5層から第11図-3・8、第12図-22・25・37、第13図-38・40、6層から第16図-75・79が出土している。

また、旧排土および1・2層からは、第11図-6・21、第13図-42・44、第14図-50、第15図-55・57・61・66・67・70、第16図-77が出土し、第12図-29、第15図-56・63・65は表掲されている。

石錐（第11図-1～21、第12図-22～37、第13図-38～40）

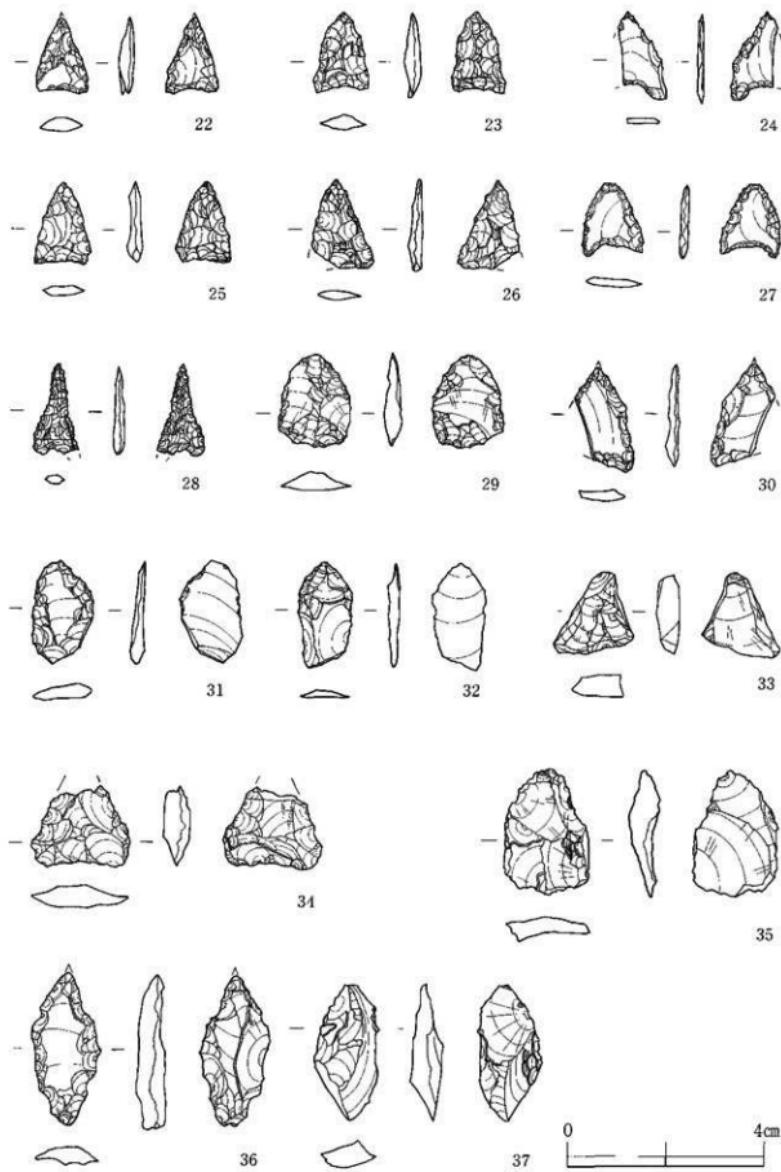
石錐は完成品および未製品を含む。未製品に関しては、文中に明記している。欠損しているものについては可能な限りその形態の復元を行ない、実際の測定値とともに復元値を載せている。石錐の重さは、平均0.5gである。

第11図-1・2は未製品である。1の石材はサヌカイトである。器長0.7cm、器幅1.0cm、厚さ0.2cm、重さ0.1gである。2の石材は姫島産黒曜石である。器長1.1cm、器幅0.8cm、厚さ0.3cm、重さ0.2gである。3は石錐の先端部であると考えられる。石材はサヌカイトである。器長0.9cm、器幅0.8cm、厚さ0.1cm、重さ0.1gである。4は未製品であると考えられる。石材は姫島産黒曜石である。器長1.2cm、器幅0.8cm、厚さ0.2cm、重さ0.2gである。5は基部の一部が欠損しており、全体に細かく整形されている。石材は姫島産黒曜石である。器長1.0cm、復元した器長1.2cm、器幅0.9cm、復元した器幅1.0cm、厚さ0.2cm、重さ0.1gである。6は先端部と基部の一部が欠損しており、全体的に細かく整形している。石材はサヌカイトである。器長1.0cm、器幅0.9cm、復元した器幅1.2cm、厚さ0.3cm、重さ0.2gである。7は先端部が円く調整されている。石材はサヌカイトである。器長1.0cm、器幅1.0cm、厚さ0.2cm、重さ0.2gである。8は全体的に細かい剥離を加えて整形している。石材は姫島産黒曜石である。器長1.0cm、器幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.1gである。9は先端部が欠損しており、石材はサヌカイトである。器長1.1cm、復元した器長1.4cm、器幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.2gである。10は未製品であり、先端部および基部が欠損している。石材はサヌカイトである。器長1.1cm、器幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gである。11は未製品であり、石材は姫島産黒曜石である。器長1.6cm、器幅0.9cm、厚さ0.4cm、重さ0.4gである。12は先端部と基部が欠損しており、石材はサヌカイトである。器長1.2cm、復元した器長1.8cm、器幅1.2cm、復元した器幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.3gであ



第11図 出土石器実測図（1）

る。13は先端部および基部の一部が欠損している。全体的に大きめの剥離で整形しており、主要剥離面が残る。石材はサヌカイトである。器長1.3cm、復元した器長2.2cm、器幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gである。14は未製品であり、石材は姫島産黒曜石である。器長1.1cm、器幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gである。15は基部の一部が欠損している。石材はサヌカイトである。器長1.7cm、器幅1.3cm、復元した器幅1.6cm、厚さ0.2cm、重さ0.2gである。16は先端部が欠損しており、全体が風化している。石材は安山岩である。器長1.5cm、復元した器長1.9cm、器幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gである。17と18は基部の一部と先端部が欠損しており、石材は姫島産黒曜石である。17は器長1.8cm、復元した器長2.1cm、器幅1.3cm、復元した器幅1.4cm、厚さ0.2cm、重さ0.4gである。18は器長1.4cm、復元した器長1.9cm、器幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.3gである。19は先端部が欠損しており、全体的に細かい剥離で整形されている。石材はサヌカイトである。器長1.8cm、器幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gである。20は先端部が大きく欠損している。石材は姫島産黒曜石である。器長1.0cm、復元した器長1.7cm、器幅1.3cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gである。21は基部の一部が欠損しており、全体的に細かい剥離で整形している。石材はサヌカイトである。器長1.5cm、器幅1.3cm、復元した器幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.3gである。第12図-22は先端部が一部欠損している。石材はサヌカイトである。器長1.6cm、復元した器長1.8cm、器幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gである。23の石材はサヌカイトである。器長1.7cm、器幅1.2cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gである。24は側縁から基部にかけて大きく欠損している。剥片の周縁を細かく整形している。石材はサヌカイトである。器長1.8cm、器幅1.0cm、復元した器幅1.4cm、厚さ0.1cm、重さ0.2gである。25の石材はサヌカイトであり、器長1.7cm、器幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gである。26の基部は一部欠損している。石材は姫島産黒曜石であり、器長1.9cm、器幅1.2cm、復元した器幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gである。27は周縁を細かく整形しており、石材はサヌカイトである。器長1.5cm、器幅1.3cm、厚さ0.2cm、重さ0.3gである。28は細長い形状をしており、基部の一部が欠損している。全体的に細かい剥離で整形している。器長1.9cm、器幅1.0cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gである。29の石材は黒褐色の黒曜石で、今回出土した石器の中ではこの1点のみである。主要剥離面を一部に残し、不規則に剥離が加えられている。器長1.9cm、器幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.9gである。30は扁平な剥片の周縁に剥離を加えて整形しており、先端部と基部が欠損している。石材はサヌカイトである。器長2.1cm、復元した器長2.2cm、器幅1.3cm、復元した器幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ0.6gである。31は未製品であり、石材は姫島産黒曜石である。器長2.1cm、器幅1.2cm、厚さ0.3cm、重さ0.8gである。32は未製品で、先端部を調整している。石材は姫島産黒曜石である。器長2.2cm、器幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.4gである。33は未製品であり、器面に細長い剥離を加えている。石材は姫島産黒曜石である。器長1.7cm、器幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ1.2gである。34は先端部が欠損している。粗い剥離を不規則に加えて整形しており、実測図左面と実測図右面の左側縁にはそれぞれ細かい剥離がみられる。石材はサヌカイトである。器長1.7cm、器幅2.0cm、厚さ0.6cm、重さ1.4gである。35は未製品で、石材はサヌカイトである。器長2.6cm、器幅1.7cm、厚さ0.6cm、重さ1.5gである。36は先端部が欠損しており、全体的に粗い剥離を加えて整形している。石材はサヌカイトである。器長3.1cm、復元した器長3.3cm、器幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ2.1gである。37は未製品で、石材はサヌカイトである。器長2.8cm、器幅1.3cm、厚さ0.6cm、重さ1.7gである。第13図-38~40は未製品で、石材は姫島産黒曜石である。38は器長2.4cm、器幅1.1cm、



第12図 出土石器実測図（2）

厚さ0.3cm、重さ0.9gである。39は器長2.5cm、器幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.8gである。40は器長1.8cm、器幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ0.8gである。

石核（第13図-42~45）

石核は4点出土しており、すべて残核であると考えられる。

第13図-42は器長2.0cm、器幅1.4cm、厚さ1.1cm、重さ1.7gである。43は打面転位を行なって剥片を剥離している。器長1.2cm、器幅1.7cm、厚さ1.0cm、重さ2.7gである。44は実測図中央の上端から剥片を剥離した後に、打面転位して下端から剥片を剥離している。器長1.5cm、器幅1.2cm、厚さ1.1cm、重さ2.4gである。45は器長3.1cm、器幅2.1cm、厚さ1.9cm、重さ13.6gである。42~44の石材は姫島産黒曜石である。45の石材は、他の石核と異なりチャートである。今回の調査では、姫島産黒曜石を素材とする石器は多いが、チャート製の石器はみられなかった。

スクレイバー類（第13図-41、第14図-46・47）

第13図-41は下端部に剥離を加えて刃部をつくりだしている。削器としての可能性がある。また、上下両端部に顯著な潰れはみられないが、扁平な楔形石器の可能性もある。器長2.2cm、器幅1.6cm、厚さ0.7cm、重さ2.0gである。石材は姫島産黒曜石である。第14図-46はスクレイバーで、石材はサヌカイトである。下端部に刃部を持つ。また、実測図左側の右側縁には上端部に向かって細かい剥離が加えられており、欠損部分にかけて刃部があったと考えられる。器長4.8cm、器幅4.3cm、厚さ0.8cm、重さ14.7gである。47は横型の石匙であると考えられる。大部分が欠損している。器長3.1cm、器幅3.2cm、厚さ0.7cm、重さ9.4gである。

石錐（第14図-48）

第14図-48は石錐であると考えられるが、錐部先端は欠損している。また、上端部にもスクレイバーとしての刃部を持つと考えられる。石材はサヌカイトである。器長5.4cm、器幅2.7cm、厚さ1.0cm、重さ60.6gである。

打製石斧（第14図-49~54）

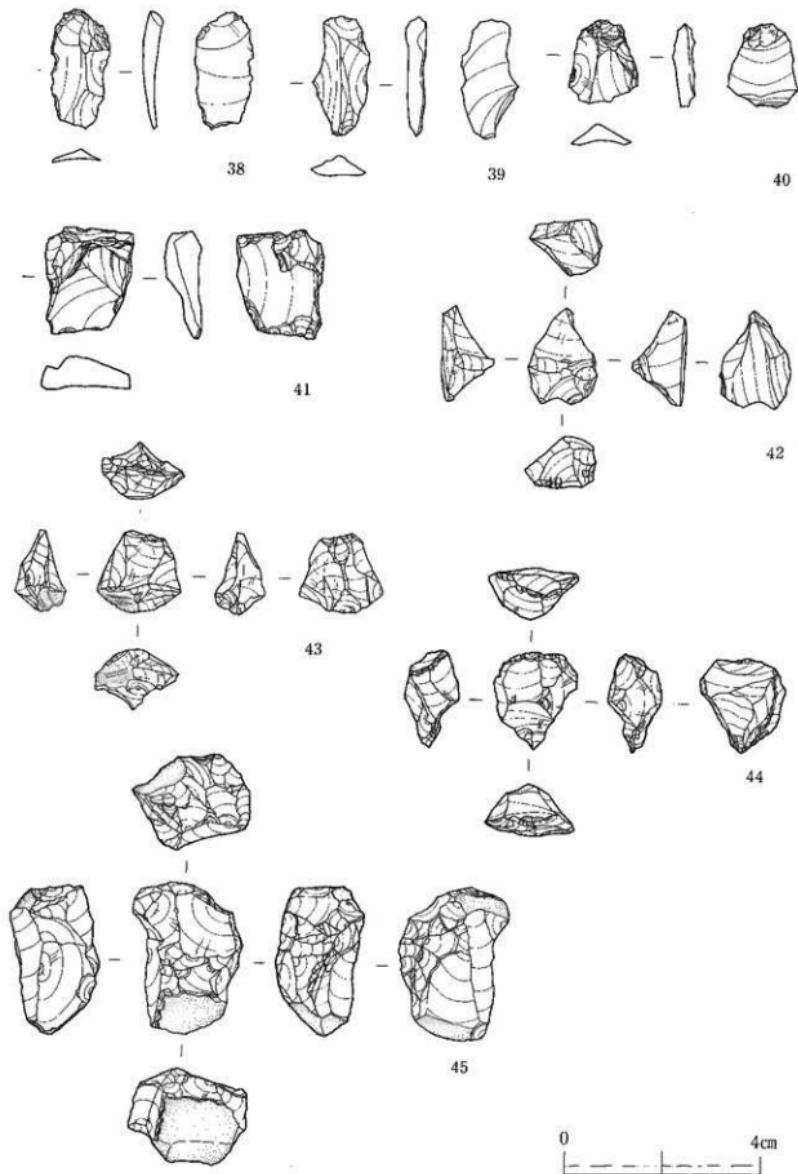
打製石斧は、大小様々な大きさ、形状のものが6点出土している。打製石斧の平均の重さは157.6gである。

第14図-49の刃部にある剥離は細かい。器長9.6cm、器幅6.8cm、厚さ2.1cm、重さ158.0gである。50は背面に自然面を多く残しており、刃部は剥離を加えて整形している。器長9.3cm、器幅6.3cm、厚さ2.0cm、重さ132.0gである。51は全体が風化しており、また自然面を大きく残している。石器製作時に剥離したと考えられる剥片が出土している。器長11.3cm、器幅7.4cm、厚さ1.9cm、重さ174.0gである。52は実測図左側の左側縁に細かい剥離を加えて整形している。器長13.2cm、器幅7.8cm、厚さ2.8cm、重さ316.0gである。53は上部付近に抉りを持ち、刃部に磨耗痕がみられる。器長10.6cm、器幅4.2cm、厚さ1.6cm、重さ90.0gである。54は背面の一部に自然面を残し、両側縁、両端部から剥離を加えて整形している。器長8.8cm、器幅5.4cm、厚さ1.7cm、重さ76.0gである。

石錘（第15図-55~70、第16図-71~75）

石錘は小さいもので約2cmから大きいもので約10cm前後の長さをしており、大きさに差がある。重さは6.0gから744.0gと幅を持ち、平均では113.3gである。

第15図-55は打欠と切日の抉りを持つ。器長2.3cm、器幅2.4cm、厚さ1.0cm、重さ8.0gである。56



第13図 出土石器実測図（3）

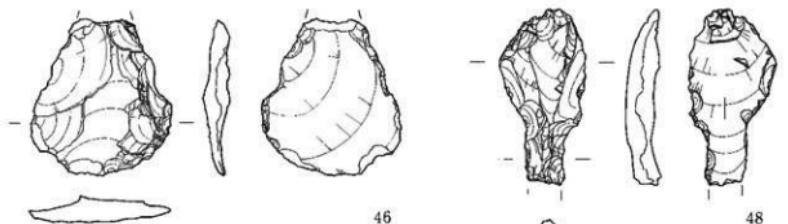
は実測図左側の右側縁に切目を持ち、左側縁は自然面の抉りを利用して、上端部は打ち欠くという3箇所の抉りを持つ。両側縁の抉りの間に光沢がみられる。器長2.8cm、器幅3.1cm、厚さ1.5cm、重さ12.0gである。57は両側縁に切目を持つ。その切目部分は擦れており、光沢がみられる。器長2.9cm、器幅4.4cm、厚さ1.7cm、重さ26.0gである。58は上端部と実測図左側の右側縁に打欠を施し、左側縁は自然面を利用して、3箇所の抉りを持っている。器長2.3cm、器幅2.4cm、厚さ0.8cm、重さ6.0gである。59は上端部と実測図左側の右側縁を打ち欠き、また下端部と実測図左側の左側縁に自然面を利用した抉りを持つ。器長3.1cm、器幅4.1cm、厚さ1.3cm、重さ22.0gである。60は両側縁を打ち欠いて整形している。器長4.5cm、器幅4.8cm、厚さ1.6cm、重さ42.0gであり、表面には鉄分が付着している。61は両側縁に切目を持つ。器長3.0cm、器幅2.8cm、厚さ1.5cm、重さ14.0gである。62は実測図左側の右側縁に切目を持ち、上端部は打ち欠いている。これ以外に実測図左側の左側縁と下端部の自然面に擦り痕がみられる。器長4.1cm、器幅4.9cm、厚さ1.3cm、重さ32.0gである。63は両側縁、両端部を打ち欠いている。器長4.8cm、器幅4.3cm、厚さ1.5cm、重さ38.0gである。64は有溝石錘であり、大きく欠損し、欠損部分の溝部が擦れています。器長3.2cm、器幅2.9cm、厚さ1.5cm、重さ16.0gである。65は両側縁に打欠を持ち、実測図左側の左側縁上部に切目を持つ。器長4.3cm、器幅3.8cm、厚さ1.9cm、重さ34.0gである。66は両側縁に各1箇所、上端部に2箇所、下端部に1箇所という5箇所の打欠を持つ。器長5.0cm、器幅5.6cm、厚さ2.0cm、重さ76.0gである。67は実測図左側の右側縁を打ち欠き、左側縁は自然面の抉りを利用していている。器長7.6cm、器幅5.5cm、厚さ2.9cm、重さ128.0gである。68は上端部に打欠と切口の2箇所、両側縁に打欠を持ち、下端部は自然面を利用している。器長6.2cm、器幅7.5cm、厚さ2.4cm、重さ144.0gである。69は自然面を残すが、多くの剥離を加えて整形している。実測図左側の左側縁は欠損し、右側縁には打欠を持つ。器長8.3cm、器幅8.5cm、厚さ2.1cm、重さ162.0gである。70は両側縁を打欠によって整形している。器長4.0cm、器幅6.1cm、厚さ2.0cm、重さ66.0gである。第16図-71は大きく欠損している。残存している上端部と両側縁を打ち欠いている。器長8.8cm、器幅6.0cm、厚さ2.2cm、重さ136.0gである。72は両側縁に各1箇所、上端部に1箇所、下端部に2箇所という5箇所の打欠を持つ。器長6.8cm、器幅9.3cm、厚さ2.3cm、重さ226.0gである。73は両側縁、両端部を打欠で整形している。器長7.7cm、器幅10.8cm、厚さ2.0cm、重さ246.0gである。74は4箇所の打欠を持ち、実測図左側の左側縁と下端部に自然面を利用した抉りを持つ。器長9.4cm、器幅8.4cm、厚さ2.1cm、重さ202.0gである。75は大形の円碟の両側縁に打欠を持つ。器長10.3cm、器幅11.9cm、厚さ4.5cm、重さ744.0gである。

磨石・敲石類（第16図-76～79）

磨石・敲石類はどれも円碟を用いている。重さの平均は535.0gである。

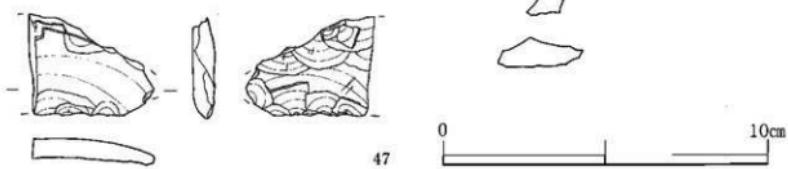
第16図-76は表面に被熱した痕がみられ、実測図のトーン部分は被熱を表す。器長7.6cm、器幅6.4cm、厚さ4.5cm、重さ318.0gである。77は下端部と側縁部に剥離がみられる。器長9.5cm、器幅7.0cm、厚さ3.9cm、重さ404.0gである。78は扁平な円碟の両側縁、両端部に剥離がみられる。器長12.6cm、器幅10.8cm、厚さ4.1cm、重さ622.0gである。79は大形の円碟の両側縁、両端部に剥離がみられる。器長13.6cm、器幅10.6cm、厚さ4.5cm、重さ796.0gである。

（酒井 雅代）



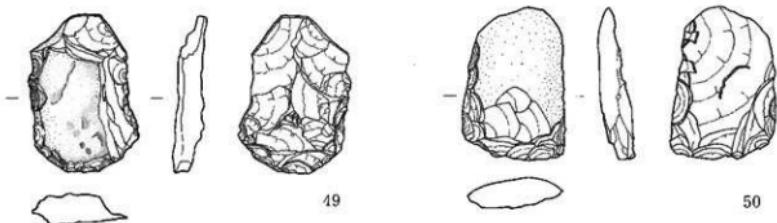
46

48



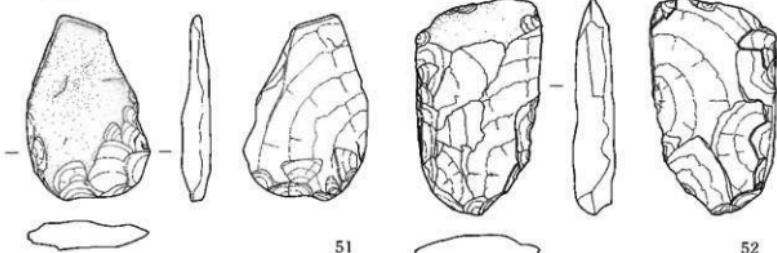
47

0 10cm



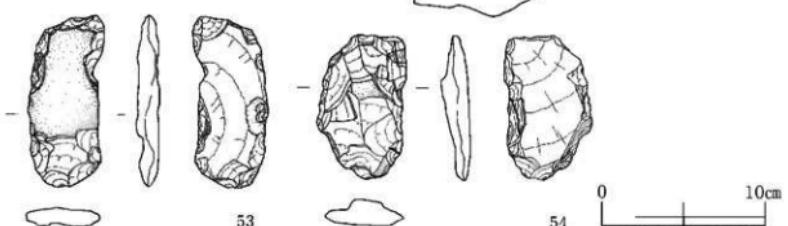
49

50



51

52

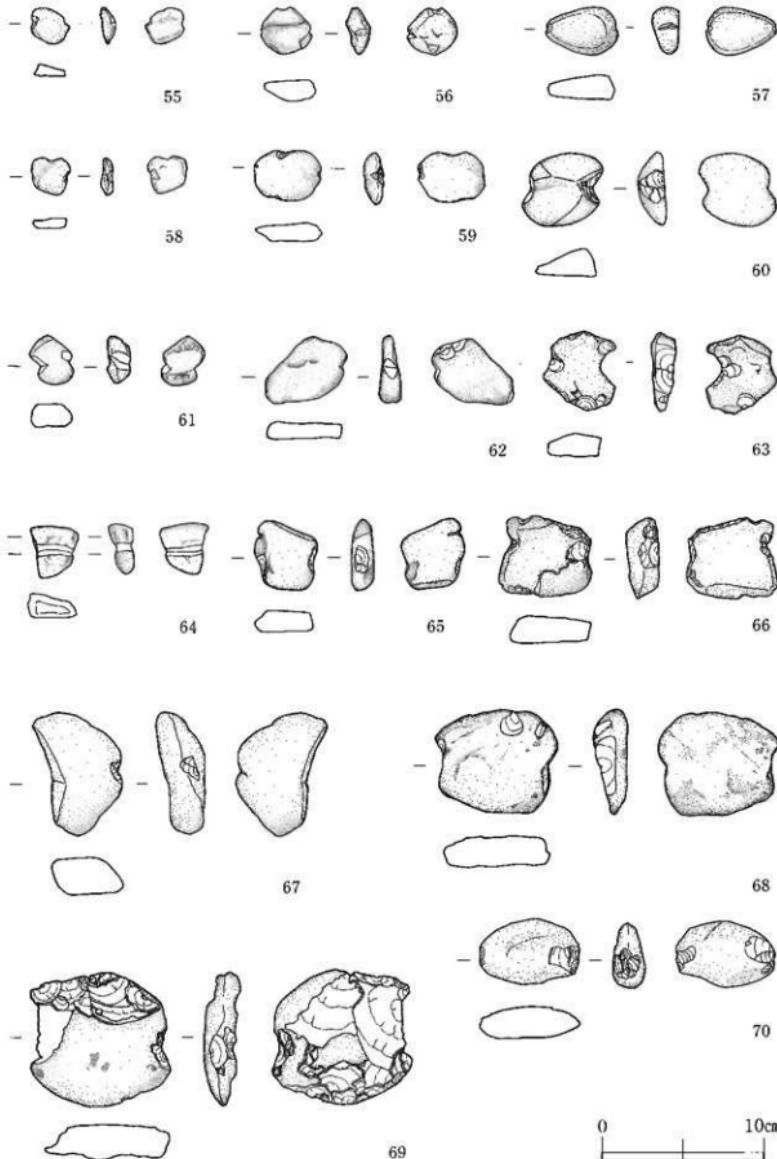


53

54

0 10cm

第14図 出土石器実測図 (4)



第15図 出土石器実測図（5）



第16図 出土石器実測図（6）

第四章 考察

1. 出土土器について

今回の調査では、縄文土器が1747点出土した。これらの資料はどれも細片で、時期の分かることは少ない。また、破片同士が接合する資料もほとんどない。その意味では、詳細な検討を加えることは困難であるが、特徴のある資料について以下、若干の考察を加えることにしたい。

I-B-a類および、II-B-a類は九州系の土器であると考えられる。第9図-3は、口唇部に押引文、外器面に連続した爪痕状の文様がみられ、胎土中に多量の滑石を含む。また、第9図-8も胎土に滑石を含む。第9図-9は口唇部に刻みを施し、外器面には棒状工具による刺突が交互に施されている。同様に、外器面に刺突が施される土器には、B-a類の第9図-15がある。これらの土器は並木式ないしはその並行型式に属するものと考えられる。並木式の時期については、従来中期前葉と捉えられることが多かったが、最近では縄文時代中期末と考える説もある（矢野1995）。しかし、石ヶ坪遺跡では在地の中期里木式は出土しておらず、また土器の出土状況だけで議論するならば、後晩期の土器と一緒に、いわゆる九州系の土器が出土するという以上のこととは言えない。ただし、ここでいう九州系の土器にしても純粹な搬入品とは言いがたく、その文様のあり方や器形等からみてむしろ在地的に変容している様相がうかがえる。このような状況は、以下の二つの想定を可能にする。一つは、石ヶ坪遺跡出土の九州系土器が、後晩期のいずれかの時期に属するという考え方である。もう一つは、石ヶ坪遺跡の九州系土器が中津式に先行する時期のものであるとする考え方である。しかし、匹見町田屋ノ原遺跡（渡辺2001）において、船元IV式および中津式に伴って九州系土器が出土している事を勘案すると、船元IV式と中津式の間に九州系土器が位置付けられる可能性も指摘できよう。その場合、資料数がまだ不十分ではあるが、将来石ヶ坪遺跡出土の九州系土器をもって、いくつかの在地の型式を設定する必要がでてくるだろう。

III-A-a類は後期の磨消縄文土器である。第9図-1・12・33は波状口縁であり、中津式土器の範疇で捉えることができ、縄文時代後期初頭に位置付けられる。A-a類である23は彦崎K2式土器に並行する時期のものと考えられる。

III-B-a類である第9図-13は波状口縁の波頂部附近であり、3本の沈線が口縁部に平行に施されている。時期については、おそらく縄文時代後期前葉に位置付けられるのではないかと思われる。

III-B-b類のうち第9図-5とB-b類の第9図-21は同一個体と考えられ、これらは黒色磨研土器の浅鉢である。細片であるため型式認定は難しいが、縄文時代後期末から晩期中葉のいずれかの時期のものであろう。

胴部資料の中でB-b類に分類されるものは、条痕を持つ無文の土器が多い。その中に、二枚貝による貝殻条痕を持つものが出上している。これらの土器は、主に縄文時代後期から晩期のものであると考えられる。

以上のことから、今回出土した土器の時期は、九州系土器はやや遅れる可能性があるものの、おおむね縄文時代後期初頭から晩期中葉にかけてのものと考えられる。

（酒井 雅代）

2. 出土石器について

第4次調査の出土石器は、おおよそ縄文時代後期初頭から晩期中葉のものと考えられる。石器組成は、石鏃27点（未製品を除く）、石核4点、スクレイパー類4点、石錐1点、打製石斧6点、石錘21点、磨石・敲石類4点であった。しかし、石ヶ坪遺跡における石器組成の最大の特徴である打製石斧は6点と少なく、また磨製石斧は全く出土していない。これは第1次調査（渡辺1990）、第2次調査（渡辺2000）と第4次調査の調査地点の差によるものと思われる。以下、第4次調査で出土した石器についての考察を記す。

今回最も多く出土したのは石鏃である。その中で、姫島産黒曜石を素材とするものが17点あり、そのうちの10点が未製品である。また、石器製作に使われたと考えられる石核も3点出土している。これらの資料から、姫島産黒曜石を素材とする石鏃の製作技術を、ある程度復元することが可能である。

石鏃の製作技術に関しては、富樫孝志が静岡県勝田井の口遺跡の出土資料を使い、素材剥片の段階で先端位置を決めていることや、長さ、幅、厚さ、重さに規定があること等を指摘している（富樫2002）。剥片剥離技術に関しては、竹広文明の研究がある。竹広は、広島県の早稲田山遺跡と洗谷貝塚の資料を用いて剥片と石核を分類し、剥片剥離作業ⅠとⅡを持つ技術を早稲田山型、板状石材を使用する剥片剥離作業Ⅲを持つ技術を洗谷型とし、時期的な変遷を示した（竹広1988）。この研究は、現在の中国地方の剥片剥離技術を検討する上で、根幹となっている。これらの先行研究を元に、石ヶ坪遺跡出土の姫島産黒曜石を素材とする石鏃について、その製作技術を考察していきたい。

まず、石核について検討する。姫島産黒曜石の石核は第13図-42・43・44に図示している。すべて1.5cm前後の小形の石核で、かなり小さな剥片まで剥離している。これらの石核は、他遺跡出土のものより小形である。43は一部に自然面を残しており、自然面と逆方向を打面として比較的継長の剥片を剥離している。その後打面転位を行ない、自然面から継長の剥片を剥離している。44は実測図中央上端より剥片を剥離した後、打面転位を行ない逆方向から比較的継長の剥片を剥離している。実測図上側には打面調整がみられる。これらの石核は、竹広のいう石核Ⅳに相当する（竹広1988）。42も打面転位を行ないながら、比較的継長の剥片を剥離しようとしているが、剥離面は一定の形態をなしていない。

次に石鏃の未製品について検討する。全体として継長の剥片を素材としており、大きさから2群に分かれる。小型の一群（以下小型剥片と呼ぶ）は第11図-2・4・11であり、最大器長1.1~1.6cm、最大器幅0.8~0.9cm、厚さ0.2~0.4cm、重さ0.2~0.4gである。2は実測図左側右側縁を整形している。4は基部を整形した後、側縁部を作り出している。11は側縁部未調整だが、器面に薄く剥離を加えており、厚さを薄くしようとする意図がみられる。大型の一群（以下大型剥片と呼ぶ）は第11図-14、第12図-31・32・33、第13図-38・39・40であり、最大器長は1.1~2.5cm、最大器幅1.1~1.7cm、厚さ0.2~0.5cm、重さ0.4~1.2gである。14は基部を整形した後、側縁部に剥離を加えている。31は器面全体を一周する形で剥離を加えているが、先端部にあたる部分にはより細かな剥離を加えている。32は石鏃の先端部となるであろう部分を調整しており、下端部に折りの技法がみられる。33は側縁部の調整を行なっておらず、11と同様に器面を薄くしようと継長の剥離を入れている。38・39・40は調整がほとんど施されていないが、38・40には下端部に折りの技法がみられる。

最後に完成品に関して検討する。未製品と同じく大小2群に分かれ、小型の一群（以下小型石鎌と呼ぶ）は第11図-5・8で、最大器長1.0cm、最大器幅1.0cm、厚さ0.2~0.3cm、重さ0.1gである。これらの素材剥片として、上記の小型剥片が使われたと考えられる。素材剥片ではまばらだった器長や器幅、重さなどが統一されている。大型の一群（以下大型石鎌と呼ぶ）は第11図-17・18・20、第12図-26であり、最大器長は復元したものを合わせて1.7~1.9cm、最大器幅1.3cm、厚さ0.2~0.3cm、重さ0.3~0.5gである。素材剥片として大型剥片が使われたと推測され、器長、器幅、重さなどの統一が図られている。

以上のことから、石ヶ坪遺跡における姫島産黒曜石を素材とする石鎌の製作技術を復元すると、以下のようない点が考えられる。1. 打面転位、作業面転位を行なっている。このような石核IVの存在は、剥片剥離技術Iの存在をうかがわせる（竹広1988）。2. 石核からは縦長を基調とした剥片が剥離され、主に石鎌の素材剥片として利用される。3. 剥離された素材剥片には大型と小型があり、使い分けをしている。4. 大型の剥片には一部に折りの技法が使われる。5. 石鎌にはある程度規定の大きさがあり、これに向かい素材剥片を加工している。このうち、5については富権孝志によってすでに指摘されている（富権2002）。また、全体的に縦長の剥片を剥離する技術がみられる点も注目される。今回出土した石鎌にはサヌカイトを素材とするものも多く含まれ、折れの技法など姫島産黒曜石と同様の技法がみられる。しかし、姫島産黒曜石が縦長の剥片を主としているのに対し、サヌカイトは横長の剥片が多いという違いがみられる。完成品に関しては、形状、二次調整の加え方など共通する部分が多く、使い分けの意図はみられない。今後の発掘で、これらの相違点、類似点を考察できる資料が増加することを期待する。この他に、黒褐色を呈する黒曜石製の石鎌が1点出土しており、第12図-29に図示している。この黒曜石製の石鎌は、田中ノ尻遺跡や石ヶ坪遺跡第2次調査でもみつかっているが（渡辺1997・2000）、匹見町全体での出土の割合は低く、また石核は1点もみつかっていない。しかし、剥片などはみつかっていることから、今後出土する可能性は高い。

打製石斧は6点出土している。側縁部に抉りを入れているものがあり、おそらく柄を装着する際に使ったのだと思われる。形状は様々であり、使い分けを行なっていたかどうかは不明であるが、第14図-53は刃部に使用痕と思われる擦り痕がみられ、掘り棒の可能性がある。大きさは、第1・2次調査のものと同様に小形である。匹見町出土の打製石斧は、遺跡ごとに大きさが異なっており、例えば水田ノ上遺跡、ヨレ遺跡では大形の打製石斧が出土している（渡辺1991、渡辺他1993）。これらの大きさの差が、機能的なものなのか、時期的なものなのか検討する必要があるだろう。

近年、縄文時代後期における山間部の生業形態として、石錘の多数出土による漁撈活動が注目されている（山田2001）。島根県頬原町の下山遺跡では、後期のもので400個近い石錘が出土しており（深田2002）、島根県仁多町の下鴨倉遺跡では、一回の調査で約500個の石錘がみつかっている（杉原1981・1990）。今回の調査でも21個の石錘が出土しており、石器組成の中で高い割合を占めている。また、形態も様々なものがあり、大きさも著しく異なっている。その中で第16図-75は突出して大きく、近辺では水田ノ上遺跡ではほぼ同程度の大きさの石錘が出土している（渡辺1991）。これらの機能的な役割が注目される。このような資料は、山間部の生業形態を具体的にうかがえるものとして今後注目されるだろう。

（稻田 阳介）

引用文献

- 杉原清一編 1981 「下鴨倉遺跡緊急発掘調査報告」仁多町教育委員会
- 杉原清一編 1990 「下鴨倉遺跡」仁多町教育委員会
- 竹広文明 1988 「中国地方縄文時代の剥片石器 -その組成・剥片剥離技術-」『考古学研究』第35卷第1号、61~88頁
- 富樫孝志 2002 「縄文時代後・晩期の石器製作技術 -勝田井の口遺跡出土資料から-」『環瀬戸内海の考古学 -平井勝氏追悼論文集-- 上巻』古代吉備研究会、173~184頁
- 深田 浩編 2002 「下山遺跡(2) -縄文時代遺構の調査-」島根県教育委員会
- 欠野健一 1995 「並木式・阿高式の縄年観変更の意義」『日本考古学協会第61回総会 研究発表要旨』日本考古学協会、34頁
- 山田康弘 2001 「山陰地方における縄文時代遺跡研究の展望 -鳥取県の研究を中心に-」『鳥取考古学会誌』第18集 島根考古学会、117頁
- 渡辺友千代編 1990 「石ヶ坪遺跡」匹見町教育委員会
- 渡辺友千代編 1991 「水田ノ上 A 遺跡・長クロ遺跡・下正ノ田遺跡」匹見町教育委員会
- 渡辺友千代編 1997 「田中ノ尻遺跡」匹見町教育委員会
- 渡辺友千代編 2000 「石ヶ坪A遺跡」匹見町教育委員会
- 渡辺友千代編 2001 「田屋ノ原遺跡」匹見町教育委員会
- 渡辺友千代・矢野健一編 1993 「ヨレ遺跡・イセ遺跡・筆出遺跡」匹見町教育委員会

第五章 まとめ

石ヶ坪遺跡では、第1・2次調査において九州系の縄文土器である並木式、阿高式土器と、在地系の縄文土器である中津式土器が共伴するという事実が指摘されている。また、他の遺跡には類をみなない大型の住居、配石遺構、多数の小型打製石斧の出土など、注目すべき点を多く含んでいる。島根大学考古学研究室は、これらの点を解明するため昨年度より三回にわたる発掘調査を予定しており、今回はその第1回目にあたる。ここでは過去の調査成果もふまえ、今回の調査の成果について若干の考察を交えながら概括してみたい。

今回は、1990年に行なわれた第1次調査で、住居址などを検出したF2区に隣接する形で調査区を設定した。しかし、第1次調査とは異なり良好な遺物包含層は検出されなかった。これは第二章でも述べられている通り、上面からの掘削によって遺物包含層である4・5層の大半が削平されてしまったためと思われる。また、隣のF2区では多量の河床礫が検出されており、報告書によると紙祖川の貢流が原因であるとされている。今回の調査区はこの延長線上に位置しており、またK~L-16~18区で6層上面に検出された礫群が、第1次調査のものと同じような分布状態をしていることなどから、K~L-16~18区は、第1次調査と同様に河川による影響を受けている可能性があると考えられる。このように考えるならば、第4次調査で確認された層位は、水田耕作時の掘削や樹根による擾乱、紙祖川の貢流などにより、純粋な層位として残っている可能性は低いといえるだろう。このような層位の堆積状況の中で、同一層内における括遺物は、どれほどの信頼性が持てるものであろうか。石ヶ坪遺跡における層位形成の要因は、今後の大きな課題となるであろう。

遺構に関しては、K~L-16~18区では多量の礫群が検出された。これらの礫群は、上述したようにF2区にみられる河床礫群と似た様相をしていた。しかし、中には礫が円形にまとまった部分もあり、台石として使用された可能性を持つ円石が検出されている点や、検出層である6層から多量の遺物が出土している点などから、人為的なものの可能性も残る。K~L-14~15区では、礫を伴う土坑が確認された。調査期間の関係で2基しか完掘することができなかつたが、周囲にはまだ数基存在するものと思われる。これらの土坑は形状から土坑墓であると推定され、上面の礫群を配石と考えるならば、同じ配石を複数の土坑が共有するというあり方を示しているといえる。上部構造は、立石や大形の石などはみられず、まばらに石を配置する楕円形のプランを呈している。しかし、遺構検出面である6層より上の4・5層が、後世の掘削の影響を受けていることから、すべてが土坑に伴うかどうかは明らかでない。また、隣接するK~L-16~18区で検出された礫群との関連性も考えられる。前回の第3次調査では、縄文時代晩期の塊状構造を呈する土坑群が検出されており、形状から土坑墓もしくは貯蔵穴とされている。これらの遺構が土坑墓ならば、今回検出された土坑墓とともに、島根県の墓制研究において重要な資料となるだろう。次回の第5次調査では引き続き残った土坑の完掘を目指し、配石遺構の様相を明らかにしていきたい。

遺物は、土器、石器ともに多量の出土をみたものの細片が多かったため、当初の目的である在地系縄文土器の中津式土器と、九州系縄文土器である並木式、阿高式土器との時期的関係は確認できなかつた。しかし、第3次調査では出土しなかつた並木式土器などの滑石混入土器が出上し、また九州

系の土器の様相をうかがわせる土器片も出土したことから、九州地方との交流の関係を証明するものとして十分な成果が得られたといえるだろう。時期決定については、明確に帰属型式を比定できるものが少なかった。時期がうかがえるものから推定すると、本遺跡における年代は、縄文時代後期初頭から晩期中葉ということになる。これは、概ね第1次調査、第2次調査の時期と同じであり、今回検出された造構や遺物は、第1次調査、第2次調査のものに伴う可能性がある。土器の中には、著しく磨滅した状態で出土したものがあり、また接合資料もみられなかった。このことは、上述した層位の成因にも大きく関わってくると思われる。石器に関しては、山間部における生業形態を具体的にうかがえる良好な資料が出土した。石鏃やそれに伴う未製品、スクレイパー類、打製石斧、多数の打欠を持つ石錐や磨石・敲石類など、縄文時代後期の一般的な石器組成をしている。しかし、第1・2次調査で多量に出土した打製石斧は、今回は6点しか出土しなかった。これは調査地点の差によるものと思われる。石鏃は他遺跡出土のものより一回り小形のものが出土しており、山間部漁撈の問題と合わせて重要な資料となるだろう。また姫島産黒曜石を素材とした石鏃は、対応する石核が3点出土しており、良好な剥片と未製品もみつかっていることから、石鏃の製作技術について検討を行なった。結果は考察で述べた通りだが、今後このような資料が島根県全体で増加すれば、一時期における石鏃の製作技術が復元される可能性があるだろう。石錐は様々な形状のものがあり、打欠、切目、有溝の3種類の他に、切目と打欠が混在するものも出土している。また大きさも個体ごとに差があり、これらの使用方法が注目される。

今回は、過去の調査と対応する包含層を確認することができたが、遺存状態はあまり良好ではなかった。造構に関しては、2基しか完掘することができず課題を残すこととなった。しかし遺物の面では、九州地方との交流や山間部における生業形態の様相などがうかがえる良好な資料が出土したといえる。また、石鏃や剥片、小形の石錐などの小さな遺物は、そのほとんどがふるいによって回収されており、今後このような精密な発掘調査が望まれる。これらの結果をふまえ、来年度の第5次調査に臨みたい。

島根大学による石ヶ坪遺跡の発掘も今回で三回目となり、糸余曲折はありながらも、成果はあがりつつある。私たち学生は、日々変化する石ヶ坪遺跡の姿に翻弄されながらも、なんとか発掘作業を終えることができた。周囲の草刈に始まり、埋め戻しの瞬間まで、一刻々々が新鮮で貴重な経験であったように感じる。整理作業に入ってからも、多くの問題点を抱え、発掘時にいかに認識不足だったかを痛感するとともに、一つの遺跡を発掘することの重要性を再認識することができた。今回の発掘は、報告書を出すということの責任の大きさを、全身で感じることができるよい機会であったと思う。今後、このような経験を生かし、考古学を学んでいく上での大きな自信となるように努力していきたい。

昨年に引き続き、匹見町役場の方々、遺跡や宿舎周辺のみなさまの暖かな御支援は、私たちが発掘を行なう上で大きな支えとなつた。末筆ではあるがこの概報の刊行をもって、感謝の意を表したい。

(稻田 陽介)

図 版



遺跡遠景（北側より）

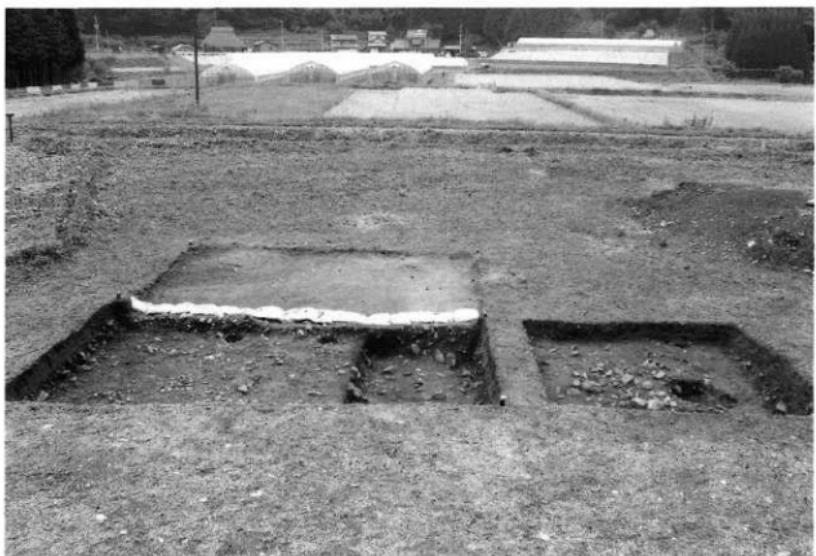


遺跡近景（南東側より）

図版 2



調査区設定状況（南東側より）



調査区全景（南東側より）



K-L-16-18区南西壁セクション（北東側より）



K-L-16-18区北東壁セクション（南西側より）

図版 4



K~L-16~18区南東壁セクション (北西側より)



K~L-14~15区北東壁セクション (南西側より)



K~L-14~15区南東壁セクション（北西側より）



K~L-16~18区 6層中礫群検出状況（北西側より）

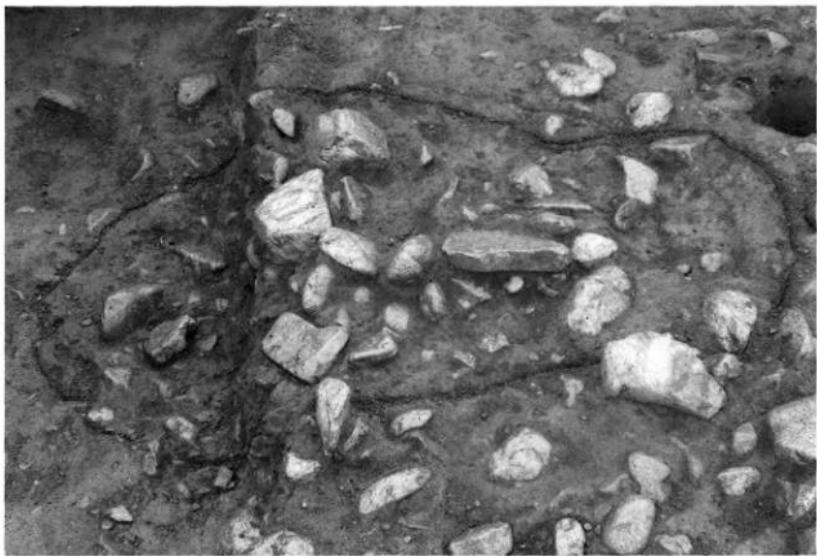
図版 6



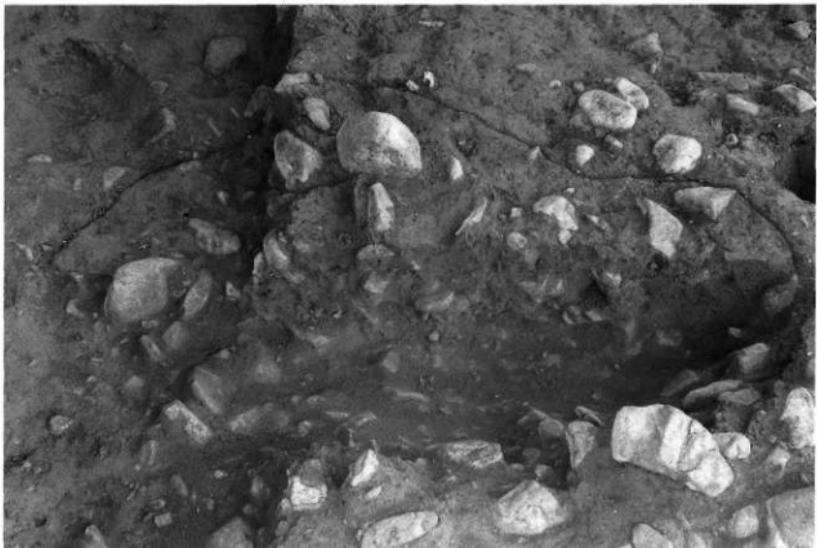
SK-02・03検出状況（北西側より）



SK-02・03完掘状況（北西側より）

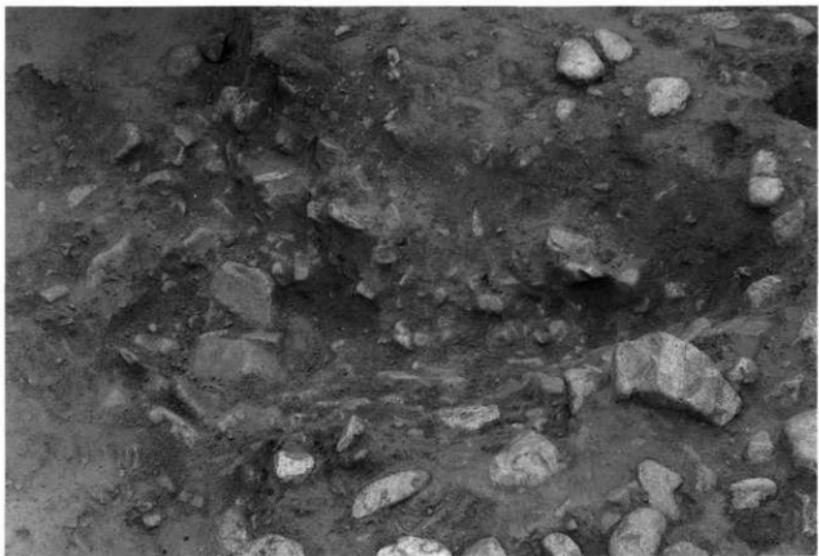


SK-02検出状況（北西侧より）

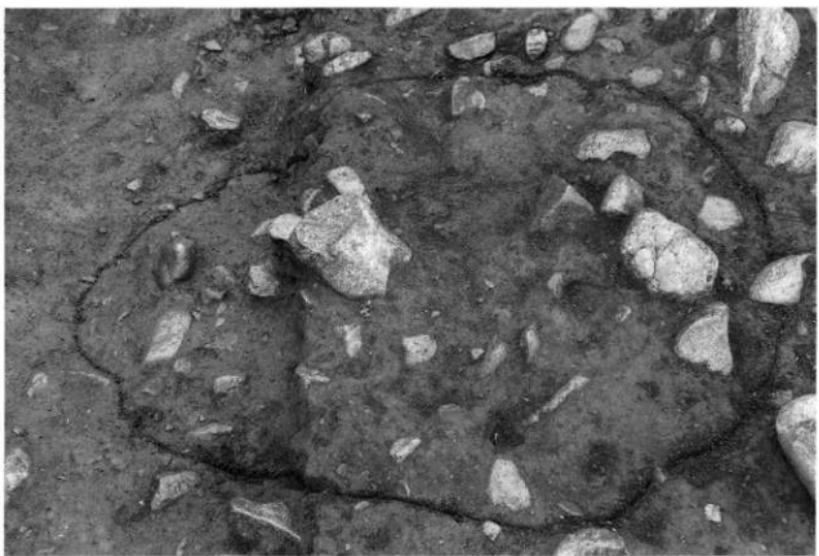


SK-02半截状況（北西侧より）

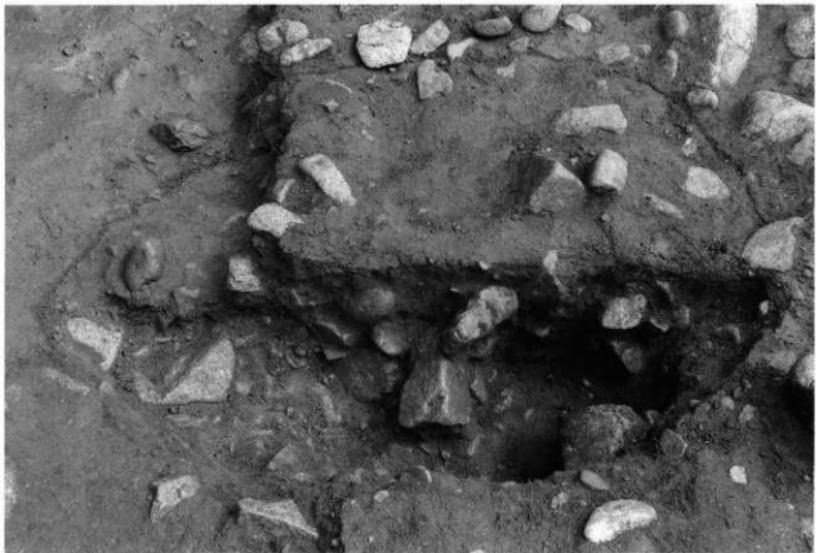
図版 8



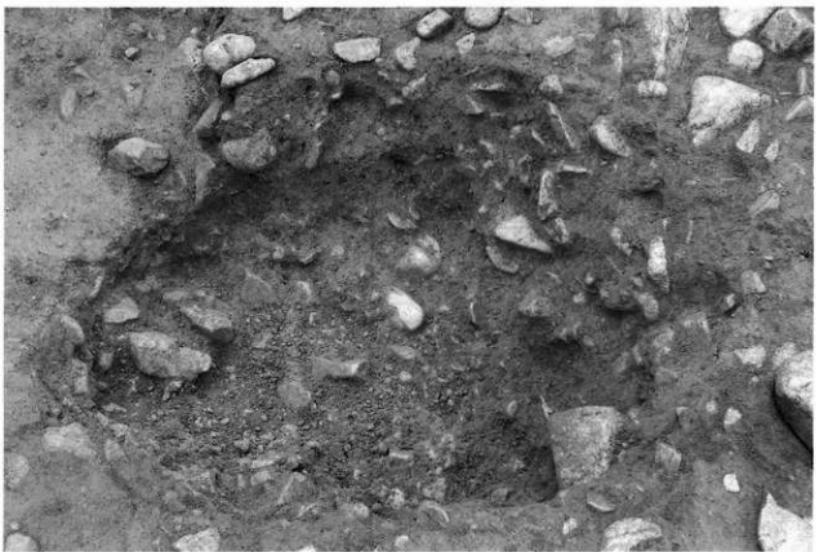
SK-02完掘状況（北西側より）



SK-03検出状況（北西側より）

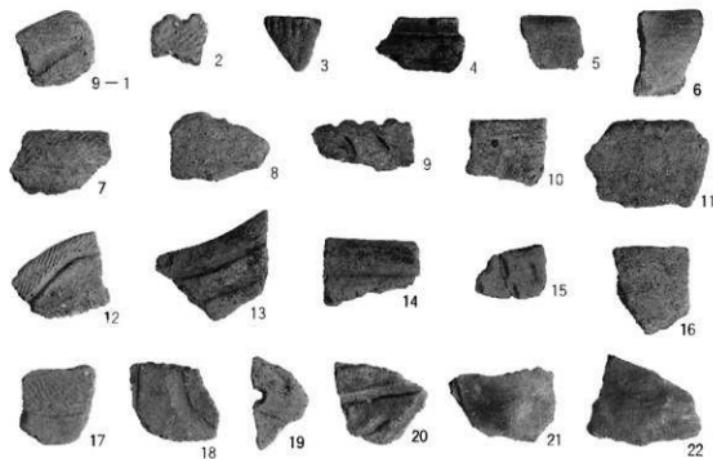


SK-03半截状況（北西側より）

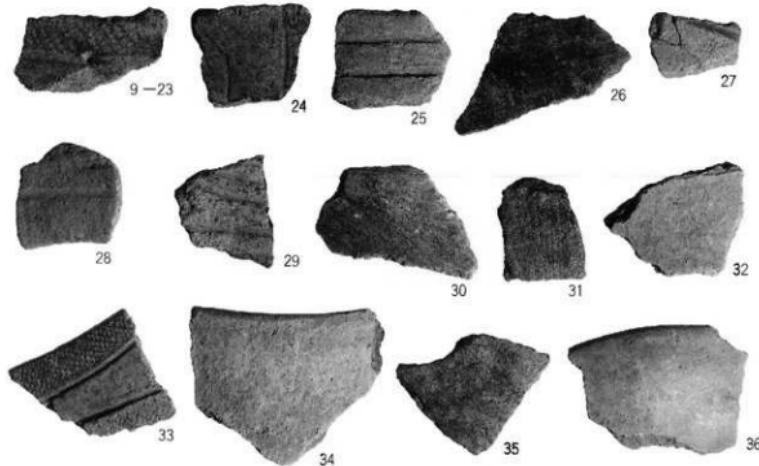


SK-03完掘状況（北西側より）

図版10

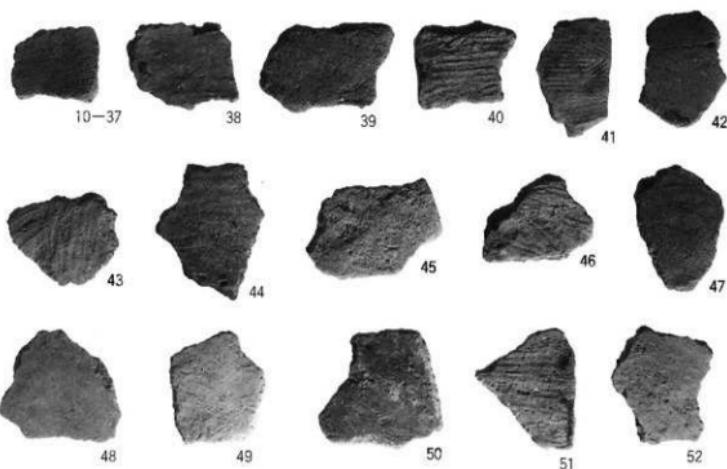


出土土器（1）

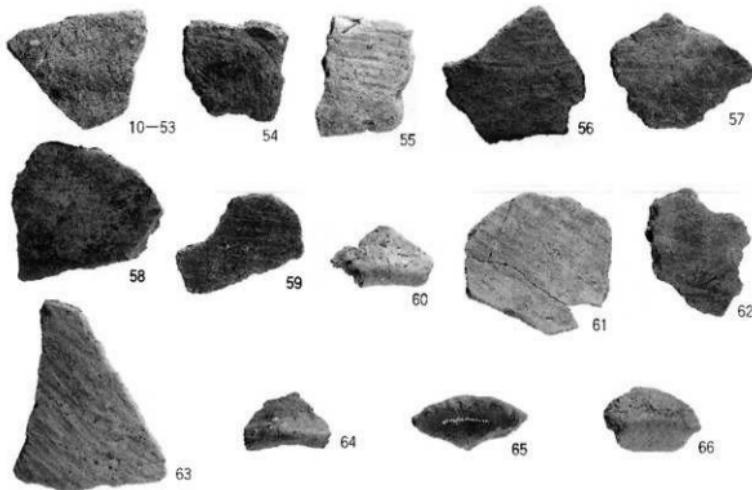


出土土器（2）

図版11



出土土器（3）



出土土器（4）

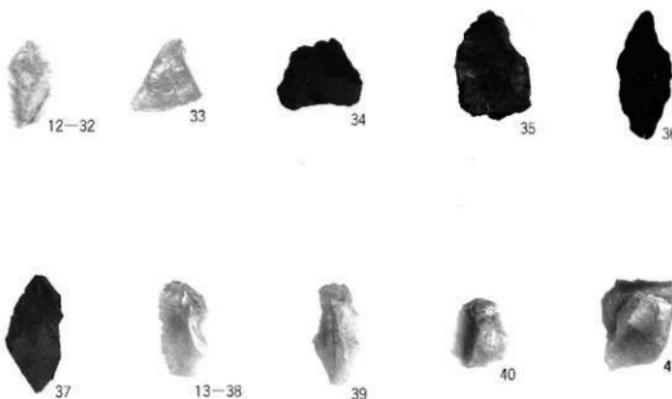
図版12



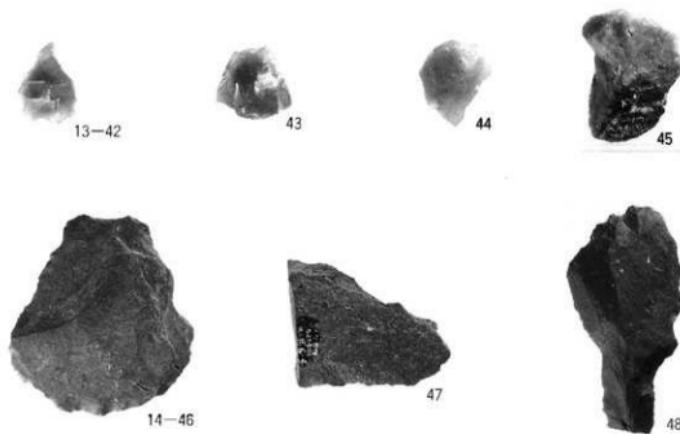
出土石器（1）



出土石器（2）



出土石器（3）



出土石器（4）

图版14



14-49



50



51



52



53



54

出土石器（5）



15-55



56



57



58



59



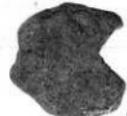
60



61



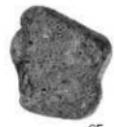
62



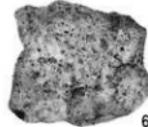
63



64



65



66

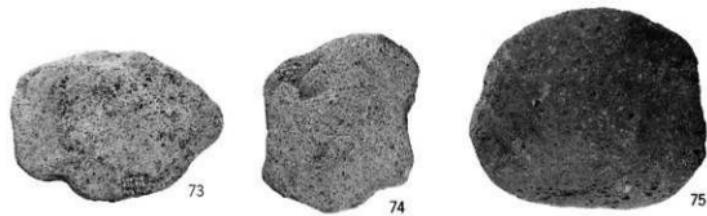
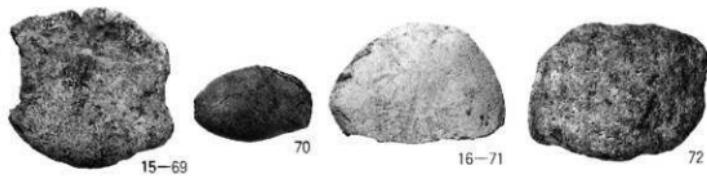


67

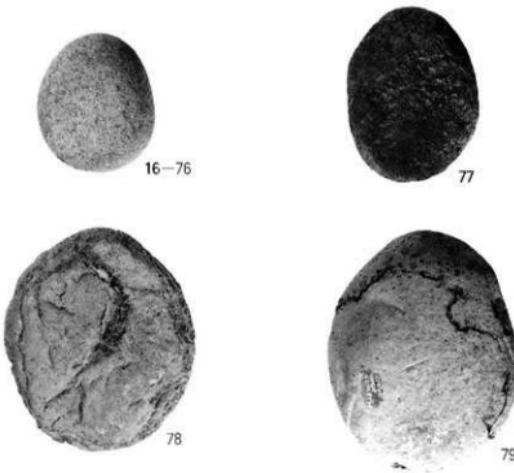


68

出土石器（6）



出土石器（7）



出土石器（8）

報告書抄録

ふりがな 書名	いしがつぽいせきはつくちょうさがいほうⅡ 石ヶ坪遺跡発掘調査概報Ⅱ							
副書名								
卷次								
シリーズ名	鳥根大学考古学研究室調査報告							
シリーズ号	第5冊							
編著者名	稲田 陽介 小池 康明 小林 大樹 酒井 雅代 日高 優子 山田 康弘							
編集機関	鳥根大学法文学部考古学研究室							
所在地	鳥根県松江市西川津町1060 tel 0852-32-6194							
発行年月日	2003年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村 遺跡番号	32482	52	34度 32分 54秒	132度 00分 20秒	20020819 20020909	64m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
石ヶ坪遺跡	生活址	縄文時代	土坑3 柱穴4 礫群	縄文土器 石器				

島根大学考古学研究室調査報告 第5冊

石ヶ坪遺跡

発掘調査概報Ⅱ

2003年6月30日

発行 島根大学法文学部考古学研究室
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060
TEL 0852-32-6194

印刷 有限会社 高浜印刷
〒690-0133 島根県松江市東長江町902-37
TEL 0852-36-9100